カメラマンとして、仕事で廃墟に行ったら、大変なことになった。

工場長

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
カメラマンとして、仕事で廃墟に行ったら、大変なことになった。

【Ｎコード】
Ｎ７２７０Ｚ

【作者名】
工場長

【あらすじ】
出版社に勤める『沙流』は、三十路で、恋人も居なく、かなりの廃墟マニア。
出版社に務めること１０年弱、長年の、下積みの苦労が、実を結び、自身の企画で、『廃墟本』すなわち、廃墟の写真集を、出すことになった。
とはいえ、アシスタントも、まだ居ないため、写真集の素材は、自分で撮って来なければならなかったものの、自身の趣味もあり、カメラ片手に、今日も廃墟に赴くのだった・・・

と、物々しいあらすじを書きましたが、気楽に読んでいただければ、これ幸いです。

全8話くらいになる予定です。

ちなみに、これは、ミクシィの方で、過去に、ワタクシが連載した、ホラーテイストの小説です。

その1

「沙流、アンタ、また直行直帰？本当に好きねぇ」

陽の光が差し込み混み合う社員食堂、アタシの前に座陣取った、会社の同僚、由美が、パスタをフォークで器用に巻きながら言った。

「まぁね、ってゆうか、廃墟がアタシを呼んでいる！こう風化した壁とか当時使っていた物がそのまま残っているのよ？その場所は、そこが使われなくなった瞬間から時が止まってる。それをね、カメラのフレーム越しに覗いていると、何か懐かしいような、それでいて凛と張りつめた空間、たまんないのよー」

「まったく、どうしてそんなもんが好きなのかなぁ、ってゆうかアレ、おっかしくない？」

そう言うと、食堂の隅に置かれた、テレビの方を向いた。そこにはお笑い番組、現在赤丸急上昇中のコンビが、コントをしていた、そこから、観客と思われる人の、笑い声が絶えず響いている。

「別にぃ・・・大して面白いとは思わないわね。」

ずっと、笑いをこらえたままの由美に、思った事を素直に言う、すると

「本当にアンタ、こういうの見て笑わないわよねぇ、私なんかこう・・・ここで大笑いをしない・・・ように堪えるだけ・・・で・・・必死・・・ククク・・・なん・・・だから。」

その時、テレビの中の人が、言った一言がツボに入ったのか、由美は肩を震わせつつ、下を向いていた。

「そんなに面白いかな？言ってる事は違うけど、使い古されたパターンか、わけのわからない事を言ってるだけ、後は勢いだけじゃん、そうでもないわね。」

「・・・どんだけ笑いに厳しいのよ、ってゆうかお笑い嫌い？」

「好きよ、でもねぇ・・・」

「そんだけ批評するなら、いっそのこと芸人になりなよ。ってゆうか沙流、アンタなら、素で今の仕事より、よっぽど稼げるかもよ？」

「どういう意味よ、ってゆうかアタシは今の仕事が好きなの。」

そう、アタシは出版社のカメラマン、色んな写真を撮るのが仕事。最初は、雑用みたいな写真を、撮るだけだったけど、長い事やっているうちに、自分の企画も出せるようになり、ようやく、夢だった、写真集を作成することになったのだ。そしてその被写体は

廃墟。

人が住まなくなって、何十年も放っておかれ、家具やそこに住んでいたであろう人達が残した当時のままの姿が残る廃墟。もしくは炭鉱の閉山と共に捨てられた団地。

当時、活気があった頃を、一人思い巡らせながら、シャッターを切る、その瞬間がたまらない。一見、ただの小汚く朽ち果てた、部屋にしか見えない、けれども、そんな空間をファインダー越しに覗いているうちに、美しく光輝く瞬間がある。
それを伝えたいだけ、これからの仕事に、胸が膨らみ、思いを巡らせていると

「ってゆうかさ、廃墟って出るんでしょ？怖くないの？」

由美が、幽霊のポーズをしながら、言った。彼女は、幽霊の類を、とても苦手としていたのだ。
アタシも、実際会ったら嫌だろうな・・・とは思う。でも幸い、霊感というものが、全くないのか、今まで、何度も趣味で、廃墟を徘徊していても、そんな目に会ったことはないので

「ぜーんぜん、今まで、散々そういういわくつきの所に、行ってるけど、そんなもん見ないわよ。それに、アタシは、肝試しに行くのが目的じゃないし、ただ、綺麗な写真が撮りたいだけ、不用意に騒いだりはしないわよ、子供じゃあるまいし」

「綺麗・・・ねぇ」

由美は、アタシの言葉を聞いて、不思議そうな顔をした。まぁ、興味の無い人には、わからないだろうし、それに、霊的な物には興味が無い。
アタシが、廃墟に侵入する時は、出来うる限り、管理者や行政に許可を取る。しかも行くのは真っ昼間、それに、必要最低限しか物は動かさない。
しかし、心無い人にとっては、廃墟は、格好の遊び場なのか、わざわざ、夜中に不法侵入して、物を壊すわ、落書きをするわ、そん

な若い子が増えてきてあっちこっち汚されているのを見てきた。
それに憤りを覚えつつ、アタシは、仕事として、シャッターを切る時は、当時のままの姿が色濃く残ったところをファインダーに納めることを信条にしている。

「ともかく、明日は早いのよね、今回のターゲットは、家からちょっと、離れたところにあるから、ちゃっちゃと仕事を片付けて、さっさと帰らないと。」

そう言いつつ席を立った。その後は事務所に戻り、鬼のような早さで、仕事を片付け、壁に掛けてある社員達の行き先を書き込む、ホワイトボードに

【直行・直帰　　納村　沙流】

枠からはみ出るくらいの大きな強い文字で翌日の予定を書き込んだ　。

□■□

「さてと、やっと着いた」

ドアを閉めて軽く伸びをする、自宅から車で五時間、某県某所の街中から少し離れた高台にそれはあった。
元々は、バブル全盛期に、リゾートホテルとして使われていたらしいけど、バブル崩壊とともに所有者が倒産してしまい、そのままになったという。
以前は真っ白い壁だったのだろうが長い年月放っておかれ、雨風

にさらされていたため、所々が朽ち果て、崩れかけたところから、コンクリートがむき出しになっていた。

「うふふふふ・・・すごくいい物件だわ」

その、いい感じで、朽ち果てた建物の姿に、思わず笑みがこぼれた、人間が無理やり自然界にうち立てた造形物。
それが使われなくなり、年月が経つうち徐々に自然に取り込まれていく途中の姿、この途中経過の風景がたまらない、そして建物全体を見回す

「え・・・と、五階建て、ってことか、結構広いけどまずは一番上から探索かな」

一人呟くとバッグの中からヘルメット、そして軍手を出して装備、準備は完了、正面玄関のドアを開けて中に入った。

「うわ・・・酷いわね」

元は受付のフロアだったのだろう、凄い荒らされようだった。
肝試しに来た若者が捨てて行ったのか浮浪者の寝床になっていたのか、壁は落書きだらけ、床はゴミだらけ、出入り口から一番近いということもあり荒らされ方が半端無かった。

「ま、こんなことだろうとは思ったけどね」

そのフロアを無視して上へと続く階段を目指した。奥へ歩みを進める途中、ところどころ割られている窓から外を覗くとその下は切り立った崖だった。かなり下には細く川の流れが見える、眺めは格別だ。

「ふぅん・・・結構いいところじゃない、景色もいいし、当時としては結構豪華な造りだったみたいね、一度来てみたかったわ」

ボロボロになった真っ赤な絨毯が敷かれた階段を上り一気に五階を目指す、昇りきると崩れた天井から陽の光が差し込んでいい気持ちだ。

「よし！探索開始！」

そこはフロントと変わらずところどころ荒されてはいたものの、人の出入りはさほどなかったのか、手つかずの客間が残っていた。

そのままにされた調度品、床に転がる座イスなど被写体としては申し分なかった、それを次々にフィルムに収める。

その後、屋上へと続く非常階段への扉を開け登ると辺りを一望出来る、眼下にはホテルのすぐ横を流れる清流、そして遠くには街並みが見えた。

「いい！いいね！これよこれ！」

気持ちが高ぶり、足取り軽く、調理場、そして、長い年月、放っておかれたためか、名前は読み取れなかったものの、ロッカーが並ぶ、以前は、仲居さんの詰め所だったであろう部屋、社長室。

多少荒れてはいたけど満足のいくものが撮れた。一息ついて、何気なく時計に目をやる

「・・・もう午後の四時かぁ、そろそろ切り上げないと暗くなっちゃうわね、それじゃあ最後にココだけ調べて帰ろう」

と、客間だったのであろう扉を開けて、一歩足を踏み入れた瞬間、

踏み降ろした足が床に吸い込まれた。

「きゃっ！」

足を取られ思わず悲鳴を上げたその次の瞬間、ドドドドド、と大きな物音と共に体がふわりと宙に浮いた。

その次の瞬間、浮いたと思っていたのが間違いだということに気づいた。

・・・アタシ、落ちてるんだ。

「きゃあああぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」

□■□

「・・・痛ッ！」

暗闇の中でどこからともなく感じる鈍痛と共に目を覚ました。

あれからどのくらい経ったのだろう。しかし、この状態でわかること、それは陽がすっかり落ちてしまった事くらいだろうか、ぼんやりとした頭で体を起こした。

「よっこい、しょっと」

どこか打ったらしく、からだのあちこちに鈍い痛みはあるものの、ケガはないみたいだ。

それと体を起こした時に手に当たった感触、これは畳だろう、そのせいもあって大丈夫だったわけか。しばらくそのままの体勢で、ボーっとしていたものの次第に頭がはっきりしてきた。

真っ暗闇、そしてここは廃墟。どんな危険があるかわからない、一刻も早くここを出る事を考えないと。

まずは明かりの確保だ、急いで持ってきたリュックをまさぐる、すると筒状の固い物が手に当たった。

「あった！」

即座にスイッチを入れると目の前の壁を眩しく照らした、そしてそのまま上を向けた。

そこには朽ち果てて完全に落ち、材木が剥き出しになっているた天井、そして更に上にはアタシがそこから落ちたであろう穴が開いていた。

「二階分くらい落ちたのか・・・最後に居たのは三階だからここは一階ってことになるわね、位置からするとここを出て真っすぐ廊下を走れば出口はすぐそこ・・・ってことか、急がないと！」

真っ暗な中を、ぐるっと照らし出口を探す、すると銀色に光るドアノブが映し出された。

「あそこか！」

すぐさま駆け寄りノブを掴もうとしたその瞬間のことだった。

【キィ・・・キィ・・・】

古い自転車をこいでいる時と同じような音、ともかく錆びたものが擦れて動くような音が扉の先から聞こえた。

（何なの・・・？）

耳を澄ませる、車輪？でもそんなものは、今まで見て回ったが、そんなも物は無かった。でも今、聞こえるこの音は間違いなく錆びた車輪の音。

（何だろう・・・）

ドアノブに手をかけようとしたままの体勢で再び耳を澄ます。
もしかしたら肝試しに来た若い集団がそっと入ってきているのか？いや、違う、それならこのガレキだらけの廊下を歩くことになるから足音もするはず、しかしあれから車輪の音だけしかしないのだ。

（どうしよう・・・）

とはいえこんな場所で一夜を明かすつもりなどない。
それに当初の予定では、とっくに家に着いて写真をパソコンに取り込み選別、そして明日には会社に持って行く準備をしなければならないのに。
しかし、この体にヒシヒシと伝わる、嫌な感じは何だろう？生まれてこのかた幽霊の類は見た事が無いし、霊感などあるとも、思ってみたこともなかった。
でも、このドアを開けた先に、何か見てはいけないものが、居るような気がしてならなかった。
思わず、大きな音を立てて、ゴクリと唾を飲む。それから、音を立てないようにゆっくりとノブを回しそっとドアを開けた。
最初、恐る恐る、ゆっくりと開いたが、このままでは、ラチがあかないし、今のところ、何か居るような、姿は見えない。
思い切って出てみると目の前には出口と反対側の廊下が続いていた。

「何も居ない・・・か、やっぱりそうよね」

一息ついて出口の方を向いたその瞬間・・・。

何かがそこに立っていた。

それが目に入った瞬間、徐々に瞳孔が開いていくのを、はっきりと、感じた。

目の前、自分から数メートルの所、車輪のついた鉄の塊が見える。食べ物を運ぶカートだろうか、それを押す真っ白い服を身に纏(まと)った人間の姿

「ヒッ！」

思わず声が漏れ、目の前の何かと目が合った、すると、私の声を、待っていたかのように、ソイツの動きがピタリと、止まったかと思うと

ソイツがゆっくりゆっくり口を開くとニヤっと笑ったのだ

それから、アタシを見つけても、なお急ぐわけでもなく、ゆっくり、ゆっくりとこっちに近づいてきている。

ソイツとの距離はたった数メートル、うかうかしていると捕まってしまう！

恐怖でその場に崩れそうになりながらも走りだした。そして、階段をよろけながら屋上を目指して、一心不乱に、階段を、駆け上がった。

そう、屋上まで出てしまえば、五階から、屋上へと続く、今まで

より急になった非常階段を、あの、鉄の塊を押して、昇って来るなど、不可能。到底、アイツは追っては来られないだろう。
根拠は無いけれども、あのカートとアイツは一体、絶対、そうに違いない。いや、そうであって欲しい！
屋上まで、逃げ切れば、そこで、そのまま朝まで待てばいいのだ。

「ハッ・・・ハッ・・・」

息も絶え絶えに五階まで駆け上がりそこから非常階段を一気に駆け上がった。そして屋上へと繋がる階段のドアに手をかけノブを回し力いっぱい、押し開けようとしたのだけど・・・

【ガンッ！】

何かが挟まっているのだろうか、ビクともしない。

「何で？何で！昼間はちゃんと開いたじゃない！」

半分パニックになりながら、もう一度力任せに、扉を押したり引いたりしてみる。しかし扉は固く閉ざされたままだ、と、その時。

【キィ・・・キィ・・・】

下の方から、さっきの恐ろしい音が聞こえた。ここは五階、アイツは一階に居る筈だ、なのに音がするということは・・・

近づいてきている！

今の場所は、五階から少し上がった所にある、非常扉の前。そして扉が開かない現在となっては、ただ逃げ場のない、行き止まりに

しかすぎない。
アタシが、モタモタしている間に、すぐ下まで来られるともう逃げ場は無い。屋上に出る事が出来なくなった今、ここに居ては、危険でしかないのだ。
慌てて階段を駆け降りる。そして廊下までたどり着いたその瞬間

【ガチャン！】

金属が何かにぶつかる音、すぐ下の方から音がした。
思わず、階段の下の方を懐中電灯で照らすと、さっきの銀色のカートの先が見えていた。それを見て思わず固まる。

・・・何であんな重たそうな物を押しながら階段を上がって来られるのだろう。

やはりアレは普通の人間ではない、そのことだけはわかった。それを理解したと同時に、心臓の音がバクバクと、異常なほど、脈打った。
しばらく、アタシは動けなくなり、それを凝視するしか出来ないでいると、徐々にさっきの白い服を纏った人の姿がゆっくりと見え始めた。
そして、アタシに気付いたのか、こっちを見て、さっき一階で見せたような、不気味な笑顔で、ニヤリと笑った。
思わず背筋が凍る。アイツの狙いは間違いなくアタシ、じわじわと追い詰める作戦なのだろうか？
とにかくここに居ても危険なだけだ、いろんなことが一遍に起こり、固くなった体にもう一度力を込めて奥に向かって駆け出した。

「隠れるところ・・・とにかく隠れるところ・・・客間？ううん、ダメ！鍵もないし入って来られたら一巻の終わり、鍵があって、ア

イツが入って来られなくて、朝まで安全に居られそうなところ・・・
」

その時、ふと目に入ったのは『W・C』の看板だった。

「ここなら！」

ともかく、目の前から消してしまいたい！そういう願いも込めて、ボロボロのトイレに、転がるように、駆け込み、鍵のかかる個室に入ると、祈るような気持ちで鍵を閉めた。

その2

完全とはいえないものの、密室になったこの空間。
ここは、畳半畳分くらいの、狭いスペースしかない、トイレの個室、これが最後の砦。
アイツは、アタシが、ここに入るのを、見ているはず。そして、間違いなく、ここに来るのだろう。
トイレの壁を見つめ、そのまま視線を上へずらした。個室と外には、多少の隙間が、あるものの、大人の体格なら、通ることは、勿論、子供でも、難しいくらいの、スペースしかない。
後は、この扉を破られないこと、ただ、それを祈るのみだった。
ややしばらくして

【ギギギギギィ・・・】

外から、トイレに入る、ドアを開ける錆び付いた音がした。すると、すぐに

【キィ・・・キィ・・・】

さっきの車輪の音、アイツがここに来たのだ。息を殺し、便座と壁の隙間に、身を押しこむ。その間も、軋む音がする度に、心臓がバクバクと音を立てていた。恐怖で脂汗が額を伝う、そして

【コンコンコン、コンコンコン・・・】

個室のドアを叩く音、音の大きさから察するに、入ってすぐのところを叩いているのだろう。

そして、アタシが入っているのは、全部で４つある個室の一番奥。
心臓が、口から、飛び出しそうなくらい、激しく鼓動する。その間にも、２番目のドアを、ノックする音、そして３番目のドアをノックする音が、聞こえてきた。

（次は、ここか・・・。）

【キィ・・・キィ・・・】と鉄が擦れる音、そして目の前から

【コンコンコン、コンコンコン・・・】

ノックの音が、聞こえる度に、ドアが小さく揺れた。
恐怖のあまり、アタシは、瞬きすることすら出来ずに、そこを凝視することしかできないでいた。すぐどこまで、迫っている、得体の知れない、何かに怯え、心臓の鼓動が、どんどん激しくなり、そのせいで、具合悪さも覚えてきたその時

【ガン！ガンガンガン！ガンガンガンガン！】

「・・・！」
さっきとは違う、強い力でドアを叩く音、目の前の板が激しく揺れている

（頼むから・・・頼むから壊れないで！）

声が漏れないように、必死に両手で口を覆った。ここに居るということを、確信しているように、扉を乱暴に叩かれ、『ガンガンガン！』という音が、個室中に響きわたっていた。
あまりの恐怖と、息苦しさで、もう気が狂ってしまいそうに、なったその時、叩く音が突然、ピタリと止んだ。そして

【キィ・・・キィ・・・】

再び、鉄の擦れる音、私の目の前の扉から、離れていっているのか、その音が、徐々に小さくなり、その後

【ギギギギィ・・・】

廊下へと続くドアが動いた音がした。

とはいえ、恐怖で強ばらせていた体を、急に動かすことは、なかなか難しく、しばらくの間、口を必死に覆い、背中を後ろの壁に押し付けたままの体勢のまま、動けないでいたものの、いつまでたっても、アレが、戻ってくる気配もなく、周囲を漂う静寂。

ようやく、緊張から解放され、思わず力が抜けたのか、便座にへたり込むように腰を下ろした。

座ったままの体勢で、思いを巡らせる、ここはひとまず安全なのか？それなら、朝までここに居て、日の出とともに脱出しよう。

ふと、時計に目をやる、ずっと暗闇に居たため目を凝らすと文字盤の針がうすらぼんやり見えてきた、それは午前1時ちょっと過ぎを差していた。

（後6時間ちょっとか・・・）

そう思った矢先

『ポタっ・・・ポタっ・・・』

一滴、二滴と何かが頭に落ちてきた、思わず顔を上げ上を見る、すると

隙間から、さっき、アタシを見て、不気味に笑った顔が、天井の隙間から、見下ろしていたのだ。

「ヒッ！」

思わず、声にならない、悲鳴を上げて、のけ反った。
すると、ソイツは、恐怖におののく、アタシの姿に、何が楽しいのかニヤっと笑うと、開いた口の間から、黒い、液体のような物が流れ落ちた。
あの黒い液体、何となくだけど、血だということが、わかった。
それが、顎を伝い、顔からポタポタと落ちている。ややしばらく、不気味な笑みを、浮かべたままだったのだが、突然、低い声で

『ミ・イ・ツ・ケ・タ・・・』

そう言った、アタシは、恐怖のあまり、瞳孔がこれ以上ないくらい開ききり、心臓の鼓動も、バクバクと、いっている。
その時、自分の中で色々と限界を突破してしまうのを感じた。
その瞬間、体の中で何かが爆発し、体の底から沸き上がる、怒りに似た、衝動に身を任せる様に叫んでいた

「うぅおおぉぉぉぉぉぉぉぉっ！」

感情に身を任せ、思い切り立ちあがると、便座に乗り右手を伸ば

す、そしてソイツの頭を鷲掴みにした。
その勢いのまま、空いた左手でドアのカギを開け扉を蹴飛ばし、手に握ったモノをトイレの隙間から引き抜き地面に叩きつけた。
自身でも、驚くほど、力がこもっていたのか、叩きつけた白い服を着た女は、地面に転がりながら壁にぶつかっていった。
相手が、生身の人間だったら、さぞや、痛いだろう。しかし、相手は幽霊だ、遠慮する必要はない。　怒りは収まらず、ツカツカと女に近づき、そのまま肩を掴むと

「とおぉりあえずそこに正座だあぁっ！」

自分でも、びっくりするくらいのドスの利いた声が出た。すると、今まで、勝ち誇っていたように、笑っていた女は、怯えきった様子でアタシを見ていた。
その表情を見て思う、いくら脅かされたとはいえ、いつもなら、幽霊だろうが何だろうが、ここまではしない、しないと思う、いや、絶対しないだろう。
でも、コイツは、アタシが、一番嫌いなことを、アタシにしたのだ。それは

『血を見るのが何より嫌い』

簡単な切り傷とか、擦りむいた時ににじむ血、それに、献血の袋すら、つい顔を背けるくらい、嫌なのだ。
それなのに、血を頭にしたたり落とした挙句、ニヤっと笑った、それが、決定打になったのだ。
更に、気に食わないのが、脅かし方が古典的、ベッタベタなのにも腹が立つ。以前、テレビの心霊番組で、こういうシュチュエーションで、脅かされる、そういうのを、何度か、見たことがあった。
そう、もうこれは、使い古されたネタなのだ。それに、アタシは、

写真を撮りに来ただけで、ここを荒そうとも、何とも思っちゃいないのに、ここまで脅かされたのも面白くない。そんな思いから

「何？何なのよ！アタシが何したってのよ！アタシはただ、写真を撮りに来てただけ！アンタに微塵も興味は無いの！ってゆうか、いい加減にしなさいよね！アタシとアンタは初対面、会った瞬間、驚いたアタシも悪いけど、アンタも、何も言わず、二ヤっと笑うなんて、どういうこと？アンタ、人としての常識とか、良識とか無いの？それに、気に食わないのは、口から、だらしなく血なんかしたたらせて！いい？アタシはね、血を見るのが一番嫌なの！アンタ、いい大人でしょ？人の嫌がる事して何が楽しいのかなぁ！そんなに余ってんなら、こんなところで無駄遣いする前に、献血行きなさいな！世の中にはね、血が足りなくて、困ってる人が、たくさん居んのよ！それとアンタ、言わせて貰うけど、怖がらせ方が、ベタ過ぎ！さっき思いだしたけど、前にこんな場面、テレビで見た事あんのよ！個室に隠れたアタシも迂闊だったけど、もうちょっと頭使ったら？幽霊ったらね、芸人と同じようなものなの！それでもプロの幽霊で・す・か？そんな安っぽい芸風で、本場行って通用すると思ってんの？ばっかじゃないの！」

怒りで、だんだん話の内容が、脱線しているのを、自分でもわかっていたものの、今までのうっぷんをぶちまけようと、怒鳴りつつ、乱暴に肩を掴み、揺らした。

最初は驚愕の表情で、アタシを見つめていた、白い女は、徐々に俯いていき、アタシの、ままなすがままに、されていた。

その姿を見て、最初、勝ち誇ったように、笑ったコイツが、アタシの口？に、反論してくるかと思いきや、なすがままにされている。その、プロの幽霊としての、根性の無さに、更に腹が立ち、説教しようと思ったその時

「うっ・・・うぅっ・・・ふぇっ・・・ふぇぇぇぇ・・・」

目の前の幽霊が、顔を両手で覆い、肩を小さく震わせ、かすかに嗚咽を漏らし始めた。

「えっ！？ちょっ！なになになに！？」

予想外の出来事に戸惑っていると不意に後ろから

「ちょっと、そこの姉ちゃん、いくら、腹が立っとるからって、四百字詰め原稿用紙一枚分も説教するなんてやりすぎやで、ちなみにＰＣの画面だと、１０行半か。ともかく、その辺で勘弁してやりい、怖がっとるやないか。」

関西弁で喋る、男の声がした。いきなりの、新手の出現に、思わず振り向くと、すぐ後ろに、熊が立っていた。

しかし、普通、動物園で見る、熊と、大きく違うのは、頭の右半分の頭蓋骨が、むき出ていて、裂けた腹から、内臓が飛び出し、その片腕の肘から先が、半分白骨化しているのだ。

普段なら、発狂ものだが、目の前の女に向けた怒りが収まりきらない今、そんな姿を見てしまうと、更にグロい風体に、怒りの矛先が、その熊に向き

「お前もコイツの仲間かあっ！」

頭を掴むと、そのまま振りかぶり、オーバースローをかました。思った以上に、力がこもっていたのか、霊体だから、軽いのか、アタシより頭一個分も、大きい熊が、投げた勢いで、地面を転がり、いつの間にか、閉められていた、廊下へと続く扉にぶつかると、実体の無いはずなのに、【ガンッ！】と、音がした。

「ハァッ！ハァッ！まだやる気？散々怖がらせられて、アタシ、一生に味わう恐怖を、使いきっちゃったみたいよ。いいわ、かかってきなさいよ、あんた等がその気なら、なんぼでも相手になるわよ・・・」

もう、目の前の異形の物を、叩き潰す。そう心に決めて、両手を広げボキボキと指を鳴らしつつ、さっき、投げた勢いで、転がったままの、熊の幽霊を睨みつけた、すると

「何や何や！血の気の多い姉ちゃんやで」

ゆっくりと体を起こし、言った。

「はぁ？『血の気が多い』ですって？そりゃあ、多くもなるわよ！そんなグロい体で、アタシの側に、現れるなんざ、滅してくれって言ってるようなもんじゃんね。なんだかんだで、限界を突破して、第二形態になりつつある、今のアタシなら、アンタ程度、頭を握りつぶした後、ありとあらゆる手段で、粉微塵にしてあげるわ。覚悟なさい、フフ・・・フフフフフ・・・」

そう言いつつ、目の前の熊にゆっくりと近づくと、熊の幽霊は、慌てふためいた様子を見せた。そして

「なんかめっちゃ怖っ！わかった！わーかった！警戒態勢の姿のまま、近づいたワシも悪かった、元に戻すから襲わんでくれ！勘忍や！」

物凄く慌てた感じで、両手を顔の前で合わせ、そう言うと、少しづつ、白骨化していた熊の顔が、そして腕が、元に戻り、腹の傷が

塞がり、飛びでいた内蔵も、無くなっていく。

「え・・・？何よ、一体どうなってんの？」

目の前で、身体が変化していく姿に、驚いて思わず尋ねた、すると

「世間一般で、『幽霊』や言われとるワシらはな、縄張りに踏み込みすぎた人間に対して、脅かすために、思った通りに、体を変化させることが出来るんや。この嬢ちゃんの、口から流した血とかも、そうやで。まぁ、生きとるモンに直接、触ったりして干渉する・・・ってことは、出来なくもないんやけどな、そうすると、生きとるモンで言うところの・・・せやな、『体力』ってヤツを結構使うんや、アンタみたいに、生きとるモンなら、疲れるだけで済むんやけど、ワシらはそうはいかん。うっかり使いきってしまうと消えてしまうんやで。」

座ったままの体勢で静かに答えた。

「消える？いいじゃん、成仏出来るんでしょ？」

すると熊は、ため息をつきながら

「今まで、長い事、幽霊やっとる間に、消えてしまった仲間を、見てきたんやけどな、成仏とはちょっと違うみたいや、ホンマの成仏なら、満足そうな顔して、消えて行くんやけど、そうじゃない理由で

、消えていく仲間が消えて行く時は、苦しみ悶えてるんや、だから、迂闊に生きとるやつには触りたくないねん。せやから、見た目だけでも、生きてるモンからしたら、恐怖を覚える姿に変えてやな、驚

かせて追い払うねん。さっき姉ちゃんが、ワシに掴みかかってきたやろ？ホンマあれギリやで、ワシ消えてしまうかと思たわ」

「え？そうなると、さっきアンタより、長い事掴んでいたのあの子は・・・？」

と、未だ、その場から動かない、白い服を着た女幽霊の方を振り返った。すると

「ギリやで、幸いこの子は、比較的若い幽霊やからな、長年幽霊やっとるワシより、体力的な物があんねん。でももう触るのはやめといてな、ホンマ消えてしまいよるから。」

その言葉に再び、彼女を見た。相変らずアタシを恐怖の目で見つめながら、固まっていた。

すると熊は、そんな彼女に熊が優しく語りかけた

「この姉ちゃん、ちゃんと話したら、わかってくれるみたいやさかい、もう自分のところに戻りぃ」

それと同時に、口からしたたっていた血が、スッと消えた。やっと、自分を取り戻したのか、乱れた髪を手櫛で直す仕草をしている。

今の今まで、長い髪の毛が、顔をところどころ覆い、良く見えなかったが、今、手櫛で髪を直したことによって、その顔をはっきりと見ることが出来た。

落ち着いて見ると、あどけなさの残る、端正な顔立ちをした、女性というよりは、少女といった方が良い顔立ちだった。

少しして、ゆっくりと立ちあがると、アタシを見て、無言で会釈をすると、そのままトイレから、去って行った。

「ねぇ熊、あの子・・・どこに行くの？」

その寂しげに去る、後ろ姿を目で追いつつ聞くと

「まぁここは部屋数が多いでな、色んなモンが住んどんのや、どうやらこの場所は、ワシらみたいなんが、住み心地がいいみたいでな、行き場の無くなったモンが、集まっとんのや。」

「へぇ・・・」

「それなのにな、ワシが静かに成仏すんのを待っとんのに、生きとるモン達が、やれ『シンレイスポット』や、やれ『キモダメシ』や言うて荒しよんねん、普段は苛立ちつつも、放っておいててんけどな、たまに、ヤンチャなヤツ等は、お灸を据える意味で、死ぬほど怖がらせてな、二度と来れんように、追い払っとんのや」

「え？そしたら何で、アタシまでこんな目にあったのよ。アタシは、廃墟に興味があっただけで、アンタ達幽霊に、興味があったわけでも、荒すつもりも無かったのに。」

「その辺は、悪かったと思とる。せやかて姉ちゃん、ここに居すぎたやろ？てっきり浮浪者やと思てな、ここに住み着くつもりかと思ててん、さっきも言ったやろ？生きてるモンにはなるべく関わり合いになりたないって、本来ならあのまま気絶してもろて、ここで、朝まで放っておくつもりやったんや」

「はぁ？アタシは、うっかり足を踏み外して、落ちた拍子に、動けなくなっただけだったんだけど。何でわかんないの？」

そう言いつつ、思わず熊に詰め寄った。すると

「うわっ！それ以上近づかんといてや！ワシ、消えてまう！ってゆうか廃墟に興味がある人間なんて、そんな奇特な人、居るとは思ってなかったさかい、せやから・・・」

怯えたように後ずさりする熊、これじゃどっちが幽霊かわからないわ

「まぁ誤解が解けて良かったわ、じゃあもうアタシはお役御免ってとこよね」

「せやな、脅かして悪かった、道も暗いし、生きてるモンからすると、地面も悪いさかい、出口まで送ったる、付いてきぃ。」

そう言って熊は、立ち上がり、歩き始めた、これでやっと家に帰れる、予定は大幅に遅れちゃったけど貴重な体験が出来たのだろうか。

とはいえ、ここの住人の事を考えて、今回の事は、人に言うつもりも無いし、話すつもりもないんだけど。

そのまま、熊に連れられ、出口へ向かう途中、ふと気になる事がありふと尋ねた。

「ねぇ熊、アンタといいさっきの子といい何で成仏できないのよ」

大きな背中に尋ねた、すると

「生前やここで、やり残した事や、引っ掛かる事があるからに、決まっとるやろ？そんなん常識やで、あの子は、ワシが何や訊いても、全く自分の事を語ろうとせぇへんから、知らへん。そんで、ワ

シはな、ここの住人が、安心して成仏できるように見守っとんのや、最後の一匹になるまで成仏でけへん、それにな、姉ちゃん、『熊』とは乱暴な言い方やな、ワシはツキノワグマの幽霊、『ゴロー』っていう名前もちゃんとあんねん、喋ることについては、『大人の事情』ってヤツや、いらんツッコミとかやめてぇな」

背中を向けたまま答えた

「へぇ・・・、アンタの芸風は、ちょっと面白いから、喋る事に関しては置いておいて、アンタはともかくあの子、何か可哀そうねぇ、立ち去る姿なんて、ちょっと影背負ってたし。」

「せやな、ワシも色々理由を聞いてみててん、イマイチ口を開こうとせぇへんのや、ここ来て何ヶ月か経つのに、名前すら知らん。しつこく聞くと、そのことに触れられたくないのか、拗ねてもうてな、そっぽを向いてしもて、話にならへんねや、それに、他の仲間からも、一歩引いた感じで付き合うてるし・・・せや！姉ちゃん、一つ頼まれてくれへんか？」

「何よ」

「すぐにとは言わん、気が向いた時でええ、あの子に花でもたむけたってや、それで解決になるとは思わへんけどな。」

「わかったわ」

話が終わるころには、出口まで来ていたのもあって、ゴローと名乗った熊に出別れを告げ、廃墟を後にした。

つづく

その3

その後、フィルムを、社に持ち込み現像。デスクで、写真の選別作業をしていると、その中の一枚、朽ち果てた、ロッカールーム、多分、ホテルの従業員が、使っていたであろう、その場所を撮った一枚に、何かが写り込んでいるのを見つけた。
良く見ると、うすぼんやりと、顔のようにも見える。

「あれ・・・？この顔、女の子に見えなくもないかな。」

そのまま、ＰＣに写真を取り込み、拡大。そのデータを、ツールで精度を上げていく。
普段なら、気持ち悪いので、見なかったことにして、早々に、ボツにするのだが、不鮮明ながらも、その顔には、引っかかるものがあり、画像を鮮明にしていった。
ややしばらくして、綺麗に・・・とはいかないものの、拡大していくにつれそれが確信に変わった。

「・・・これ、あの子じゃんね。そういえばあの熊、ゴローだっけ？あの女の子に『自分の所に戻りぃ』とかなんとか言ってたわね。ってことはあの子の居場所は多分・・・ここ」

マウスを握る手が止まる、そしてあの夜の事を思い出していた。
あの時は、何か変なテンションになって、うっかり幽霊に襲いかかってしまったが、今考えると『2ちゃんねる』の、オカ板に貼れるくらいの、経験をしたのだ。
不意にそのことが頭を過ぎり、思わず背筋に冷たいものが流れた。
それと同時に帰り間際、あの幽霊熊のゴローが言った

「気が向いたら花でもたむけたってや」

その言葉が、妙に耳に残り、頭の中を、駆け巡った。それを振り払うように

「あぁもう！アタシにゃ関係無いっつーの！」

バンっ！と机を叩いて立ちあがった。その音に、同室の同僚、仕切りを挟んで、向かいのデスクに座っている由美が

「沙流、うるさい。」

背伸びをして、仕切りから、顔だけ出しつつ、言った。

・・・ったく、人の気も知らずにさ。思わず、つい先日会ったことを話してしまおうかと思ったけども、幽霊嫌いの由美に、そんなこと話すのは、さすがに可哀想かな。そう思い直し

「いや・・・まぁ、その、何でもない、何でもないのよ。」

そう言って、再び座った。

それにしても、もうあんなことには、関わり合いになりたくはない、それに、ゴローが、帰り道、アタシに話をした内容を、信じるとするならば

「霊はしつこくしない限り直接人間に危害を加えることはない」

「それ以前にあまり生者と関わり合いになりたくない」

放っておいても害は無い、無視すりゃいいのだ。ただ、テレビや、ネットの情報だと、『霊の呪いでもうこりゃ大変』ってことがあるかもしれない。

しかし・・・アタシはあいつらに恨まれるようなことしたかしら？

・・・。

・・・。

・・・！！

めっさやらかしてんじゃん！

白い服を着た、少女の方には、アイアンクローをかまし、床に転がした挙句、大説教。

そして、熊の方にも、同じくアイアンクロー。勢い余って、そのまま投げっぱなしの、オーバースローで、壁に叩きつけたんだっけ。

「うあぁ・・・」

思いっきり、やらかしてしまったことを、鮮明に思い出し、いたたまれなくなって、頭を抱え机に突っ伏した。そんなアタシの様子をを見ていたのか、由美が

「アンタ、まぁた何やらかしたんでしょ？通称『歩くトラブルメーカー』とは、良く言ったもんだわ。もしかして、去年の忘年会の時、アンタがやらかした、酔った勢いでその場に居た、面倒臭い客に絡んで、口論になった挙句、相手の男に、アイアンクローをかまして、そのまま投げたり転がしたりとかしたんじゃないでしょうね？たまにアンタ、怒ったり泥酔したりすると、何かのきっかけで、限界突破して、ありえない力出すんだから、日ごろから注意しなさいって言ってるでしょ？」

自分の席を立つと、こっちに来ながら言った。

「・・・大体合ってる、ってか今回のは、アタシには、全く非が無いはずなんだけど。」

間違っても相手が幽霊だった・・・なんてことはいくらなんでも言えなかった。

それにいつも、あちらこちらでやらかしているアタシだけど、今回ばかりは自分は悪くない、幽霊騒ぎのことは伏せつつ、どう言ったら信じてもらえるか、考えていると

「悪い悪くないは別として、ケジメだけは、ちゃんとつけといた方が、いいんじゃないの？日が経てば経つほど、取り返しのつかないことになるわよぉ」

完全に、アタシが諸悪の根源、そう思い込んでいる様子の由美が言った。

□■□

「またココに来るハメになるとはね。」

霊の、例の一件があった廃墟、会社の休みを利用し、花束を持って再び訪れた。

勿論、当然昼間、もうここには、足を踏み入れたくないんだけど、ケジメはちゃんとつけないとね。そう、自分に言い聞かせ、扉を開けて中に入る。

相変わらず、出入り口付近は荒されたまま、そこを通り抜け真っ直ぐ五階に上がる、目指すは奥の方のロッカールーム、そこに花束をたむけ、手を合わせれば任務完了。さっさと終わらせて帰ろうと

廊下を一歩踏み出したその時

「ねーちゃん、ねーちゃん。」

人っ子一人居ないハズの、静寂の空間。私のすぐ後ろから、不意に声がした。

「ヒッ！」

思わず、声にならない、悲鳴を上げて、立ちすくむ、すると

「何や、もう忘れてしもたんか？ワシやワシ、ゴローや、それにしてもちゃんと約束守ってくれはったんやなぁ、恩に着るで。」

その声に辺りを見回す、しかし誰も居ない、なおもキョロキョロしていると

「何や、すぐ後ろにおるさかい、ちゃんと目ぇ開いとんのかいな。・・・って、そういえば、生きとる人間は、よほど霊感ってのが強くない限り、日の光の下じゃ、ワシらの姿見えへんやったなぁ。すっかり忘れとったわ。それにしても、ホンマ、来るとは思てなかったで、こないだ、あんな思いをさせてもうてん、もう来ない思てたわ。それにしても、いきなりここまで上がって来るなんて、よく、あの子の居場所がこの辺やわかったなぁ。」

私の訪問に、ことのほか喜んだのか、何も無い空間から、喋り倒す、関西弁の、機嫌の良さそうな声が響いていた。

この喋り方は、明らかにゴローだ。とりあえずどっちを向いて喋ったらいいのかわからないので、そのままだれも居ない空間に声を投げた。

「アタシが撮った写真に、あの子が写り込んでたのよ、この先の薄暗いロッカールームでしょ？」

「せや、何も薄暗いあんなとこ使わんでも、他にいっぱいえぇとこあんのにな、何度言っても『ココがいい』としか言わん、ま、わかっとんのやったら話早いわ、とりあえず会いに行こか、付いて来い。」

その言葉に、奥へと歩き出した、少し歩くと横の扉から

「隣の家に囲いが出来たってねー」

「こんなご時世に、金持ちなんやなー」

「ちゃうやろ！そこは『へーかっこいいー』やろ？」

ボソボソと声が聞こえてきた

「・・・イマイチね」

思わず呟く私に、ゴローが言う。

「この部屋は、生前、売れないまま、人生を終えた、漫才コンビの霊が住みついとる。営業に向かう途中に、バスの事故に巻き込まれたんやと。一日中飽きもせずに何やしゃべくってるわ、確か名前が沖村と阿部って言ったかな」

さらに歩みを進めると別の部屋から

「うううぅ・・・ネタが、ネタが出ないよー、今日の更新どないしよ、とりあえずニコニコでも見て・・・いや、いかんいかん！何で

もいいから一行でも書かんと、って、あーっ！間違えて全部消してまったー！ぎゃー！」

ブツブツ悩んでいたと思えば今度は絶叫、声の感じからすると中年の男性だろう

「・・・今度は誰？」

「素人作家の霊でただのアホや、酒の飲みすぎで肝臓やられて死んだんやと。構うとアホが伝染るで」

「・・・呪いみたいなもん？」

「そんなもんや」

そのまま奥へ奥へ進む、すると、目的のロッカールームの部屋、躊躇(ためら)いつつもゆっくりとドアを開けると、目の前に広がるのは、ジトっとした、薄暗い空間だった。

少し、物々しい空気が流れているけど、あの子に会わないと、そう思い、意を決して一歩踏み入れた。すると

「嬢ちゃん居るかぁ？こないだの姉ちゃんが、花束持って、来てくれたで、姿見せぇ」

ゴローの声、陽の光がほとんど届かなく、暗い所に入ったせいか、目の前にうすらぼんやり熊の後ろ姿が見えた、すると奥の方から

「・・・何ですか？」

少女の声、声はすれども姿は見えない

「『何ですか？』ってさっき言うたやないか、いいか、もっかい言うで、こないだの姉ちゃん、覚えとるやろ？その姉ちゃんが、花束持って来てくれはったで、ちょっとは姿見せぇ、こないだみたいに嬢ちゃんに危害は加えへんて」

ゴローが声をかけた。すると

「・・・そこ、置いておいて下さい」

ボソボソとした暗い声で、良く聞き取れなかったものの、その声から察するに、明らかに不機嫌そうだった。すると、ゴローが困ったような声で、『嬢ちゃん』と、呼びかけた、女幽霊に言った。

「何や、こないだのこと、まだ怒っとんのか？確かに、人間とは、よう関わり合いに、なりたない言って、嫌がる嬢ちゃんに、頼むからと、この姉ちゃんを脅かすよう言ったんはワシや、しゃあないやろ？他のは、建物の外で、騒ごうとしとった、タチの悪い、若い連中を追い払うのに、出払っとったんやし、ワシも、みんなまとめるのに、忙しゅうて手ぇ放せへんかったし。そんな時、気が付いた時に、うっかり、建物の中におった、この姉ちゃんの相手するのは、みんなと一緒に行かなかった嬢ちゃんしかおらへんかったんやろ？その辺わかってたやろ？女一人やし、嬢ちゃんがちょこっと脅かせば、気絶するか、出てく思てたけど、思わず反撃を受けてもうて、思い通りにはいかへんよってに、そのことは、悪い思とるよって。」

すると

「・・・別に怒っていません、もう話は済んだんですよね？お願いだから私にあまり構わないでください」

再び、ボソボソ喋る声が聞こえた。

「せやかて・・・」

暖簾(のれん)に腕押しとは、このことか。どんなに言っても、反応の悪い彼女に、すっかり困り果てた様子のゴローだった。

その、二人（？）のやりとりを見ているうちに、何かこう、その暗いだけの、女幽霊に、だんだんイラついてきた。

生前、何があったかはわからない、でも、幽霊だろうがなんだろうが、グチグチ、はっきりしないヤツには、腹が立つ。とにかく、一言、バシっと言ってやりたくなり、花束を持ったまま、ゴローの横を通り抜け、奥に向かった。すると

「おっ・・・おいっ！姉ちゃん、姉ちゃん！どないするつもりや！嬢ちゃんを、鷲掴みにするとかは、もう、勘弁やで！」

「わかってるって。」

制止しようとするゴローに、そう言って、奥へと進むと、薄暗さが一層色濃くなった、ロッカーの隅に、こっちに背中を向け、膝の間に、顔をうずめながら、小さくなっている、白い服を着た少女の姿を見つけた。それに思わず

「・・・みぃ～つけた」

そう言うと、思わず口もとが緩んだ。すると

「ヒッ！」

突然、アタシの声が、近くなったことに、びっくりしたのか、背中を向けたままだったけど、ビクっと体を震わせると同時に、顔を上げ、驚きの声を漏らす彼女に

「いや、立場が逆だから、アタシがここに来たのはね、この間のことを謝りに、少ない給料から、奮発して、アンタのために、コレ、わざわざ買って来たの、ちょっとは喜びなさいな。」

花束を地面に置いた、すると

「・・・別に頼んでいません」

少女は冷たく言うとまた俯きうずくまってしまった、すると後ろで見ていたゴローが

「嬢ちゃん、いくらなんでもその態度はないやないか！」

さすがのゴローも彼女の態度に語尾を荒げた。すると

「もういいから二人とも出てって！」

その言葉を口火に、怒った様子で、女幽霊も、語尾を荒らげた。その態度を見て思う、確かにあの時、散々暴れて、この子を怖がらせたのは、紛れもなくアタシ。それに、ゴローには頼まれたものの、この子に頼まれたわけでもないのに、花束を買って来たのもアタシ。

でも、アタシはともかく、おせっかいかもしれないけど、色々心配してくれている、ゴローにまで、そんな態度をする彼女に、腹が立ち

「ちょっとアンタ、熊とはいえ、ゴローに対して、随分な態度じゃないの！いつまでも、薄暗いところで俯いて膝なんか抱えちゃって、ウジウジウジウジ！生前、何があったのかは知らないけどね、いつまでも、そんなんだと、いつまでたっても成仏できないわよ！ちょっとは、ゴローの苦労もわかりなさいよね！ってゆうか、馬鹿なんじゃないの？それにアンタ、生前友達なんて一人ももいなかったでしょ？そんなんじゃ、虫なり、魚なり、生まれ変わるだけ無駄だわ、一度、あの世ってとこで、考え直してからじゃないと、生まれ変わっても、何もいいことないわよ。」

再びマシンガントーク炸裂、今回は控えめに原稿用紙半分くらいにしておいた、すると怒った表情で立ち上がりアタシを睨みつけながら

「アンタに私の何がわかるっていうの！」

そう怒鳴りつつ食ってかかってきた、おっ、痛いとこ突かれて、逆ギレしてきた、ってとこか。

まぁ、このくらいじゃないと、逆に心配よね。そうは思ったものの、今後のために、この子に畳み掛けておくか・・・と

「わかるわよ、アタシはともかく色々アンタのことを心配して世話焼いてくれるゴローにすらあんな態度取るんだもん、友達なんて出来っこないわよね。それに、普段のアンタの、その喋り方。ボソボソとよく聞き取れないのよ。ちゃんと自分の意思をはっきり伝える、生きてても死んでても同じよ、それにアンタ、雰囲気が暗いのよ、そんなんじゃ誰も寄ってくるわけないじゃん、まだあるわよ、決定的なのはこんなに近しいゴローすらアンタの名前を知らないなんて、友達作るのが下手な何よりの証拠よ、どうせ生きている時もアンタ、死んでいるのと同じような生活を送ってたんでしょ？」

自分でも、結構キツい事言ってるな、そう思っていると

「うっ・・・そこまで・・・そこまでズケズケと言う事ないじゃない！」

女幽霊は、拳を握り締め、涙交じりの声で言った。

「言うわよ、ってゆうか、アタシ、アンタみたいのが、一番嫌いなのよ。何なら、もう一戦おっぱじめてもいいわよ？」

それに、そう答えると

「姉ちゃん、それはちょっと勘弁やで、姉ちゃんが、本気出したら、ワシら、バラバラにされてまう。」

ゴローが、困り果てた声を出した、するとその時

「私だってちゃんと学校にも行きたかったし友達だって欲しかった、でもうまく人と接することが出来ないの！怖いの！みんなあなたみたいに誰とでもうまく付き合えるなんて思わないで！」

そう言うと、袖で、涙を拭うような仕草をした後、アタシを睨むと

「それにさっきから『アンタ、アンタ』って、私はミサっていう名前もある！あなたみたいな失礼な人にアンタ呼ばわりされたくないわ！」

気持ちが昂(たかぶ)っているのか、さっき、拭ったばかりの瞳から、涙が

どんどんこぼれ、頬を伝っていた。
何だ・・・その気になれば、ちゃんと出来んじゃんね。ちょっと安心したわ。
そろそろいいかな、と、出来るだけ優しい声を出すことを心がけながら

「何だ、ミサちゃんって言うんだ、やれば出来んじゃん、ちょっと安心したわ、ただちょっと勇気が足りなかっただけ、それとね、さっき、アタシのことを『誰とでも上手くやれる』って言ってたけどそんなことはないわ、学生の時は、さっき、指摘を受けた通り、『失礼』って言われる、この性格のせいで、色々やっかみも受けたし、陰口も散々叩かれた。大人になって、やっと念願の出版社に就職してからも、うまくいかないことの連続だったしね。うまくいかずに、怒られて、帰っても誰も居ない、自分の部屋で泣いたこともあった。でもさ、いつか必ずカメラ片手にあちこち飛び回ってやる、そう心に決めて頑張った、だから今があるの。」

アタシが話ていると、徐々に、ミサが俯いていった。彼女の肩は、慣れない事をしたせいなのか、小さく震えていた。ちょっと言いすぎたのかな。
とりあえず、もう、ここには来る予定も無いし、これだけは言っておくか。と

「まぁ、とにかく、とっとと成仏しなさいな。そして運良く人間に生まれ変わったら、今度は強く生きな、言いたい事は言ったから。そしてもうここには来ない、ゴローにも迷惑かかるからね、それから・・・あまりゴローに心配かけんじゃないわよ、それじゃね。」

とはいえ、少女は俯いたままで、返事が返ってくることはなかった。それでもちゃんと言いたいことは伝わっただろう、そう思い部

屋を後にした。それに続き、アタシの後についてくるゴロー。
部屋を一歩出ると陽の光が届き、明るくなった。振り返ると、ゴローの姿が見えなくなっていた。
そのまま歩き出すと、どこからともなく

「姉ちゃん、さっきわざと嬢ちゃん、いや、ミサちゃんのこと、怒らせたやろ」

ゴローの声がした、それに

「え？何だ、わかってたんだ。まぁ、今回のことで、アンタに対する、あの子の態度が、急に変わるとは到底思えないけどさ、乱暴だとは思ったけど、何思ってるのか聞きだすにはこれしか無いでしょ？アンタ、前にさ、アタシを送ってくれた時、言ってたじゃない、名前も素性も知らないって、だから聞き出しといてあげたのよ、これで少しは対処の糸口が出来たでしょ？後はここの管理人であるアンタの仕事、せいぜい頑張りなよ。」

どこに居るかはすでにわからなかったけど彼に言う、すると

「なんもかんも世話焼いてもろてすまへんな、嬢ちゃんのことは引き受けた、後はワシが何とかするさかい、ま、機会があったらまた遊び来ぃや・・・」

階段を下りるアタシに、ゴローは、一緒に降りて来ないのか、彼の声は、アタシとの距離が遠くなっているのを感じた。
四階まで降りてきたところで、振り向いて、上を見上げると、アタシは

「もう来ないって言ってるでしょ！後はアンタの仕事なんだから

！じゃね！」

大声で言った

その3（後書き）

―ここから後書き的なものです―

今更ながら、このお話、実は、ミクシィの方で、連載していたお話です。

そして、ここに上げるために、タイトルを変えていますが、本当のタイトルは『定山渓番外編、トイレの花子さん・・・ってみようか』、なんです。

と、三話目に、いきなり後書きを入れたかというと。

本編の中に『酒の飲みすぎで、肝臓をやられて死んだ霊』というのが、出てきますが、これは

ワタクシ、作者のことです。

実際は、ピンピンしておりますが、ワタクシの小説は、自身が、ちょいちょい、出ております。

そんなわけで、分かりづらいネタなので、ここに、注釈を入れておこうと思った次第です。

それではまた、工場長でした。

その４

その後、写真集に載せるための資料は、徐々に揃っていった。
完成までもう少し、アタシが長年夢にまで見た、自分が手がけた写真集が出来上がるのだ。ある日、夜遅くまで、会社に残り作業していると

「沙流、最近珍しく仕事熱心ねぇ、はい、差し入れ。どっちがいい？」

同じく、別の作業で残っていた、同僚の由美が、ジュースの缶をアタシの前に、出した。

「コーヒーに・・・何コレ？『つぶ入おしるこ』？誰が飲むのよ、ってゆうか、それ以前に、真冬でもないのに、何でこんなもん、会社の自販機に売ってるのよ？折角、買ってきて貰ったのに悪いけどさ、ぶっちゃけこれ一択じゃないのさ。」

缶コーヒーを受け取りつつ笑った。すると

「えー・・・。この『つぶ入りおしるこ』、美味しいのにぃ。まぁいいわ、それよりも沙流、さっき、ウェブ上でちょこちょこやってたら、気になる記事があってね、ちょっと私んところ来なさいよ。」

そう、手招きしながら、自分の席に戻る由美。それにつられるように、近寄り、デスク上の、ＰＣのモニターを見た。そこには

『心霊スポットで有名な、廃墟ホテル解体か？名乗りを上げたの

は・・・』

「・・・これって」

モニターに映る記事に、息をすることを忘れ、食い入るように、見入っていると

「アンタがこの前、写真を撮りに、行ったホテルじゃないの？でも良かったわねぇ、廃墟のまま放っておくなんて。治安的にもアレだし、土地だって無駄になるし、ねぇ？」

由美が言う、あそこは、今にも崩れそうな上、危険な場所だし、そのせいなのか、心無い若者のたまり場になっている。でも・・・でも、あそこが無くなってしまったら、ゴローやミサ、他の霊達はどうするんだろ？

アタシの中で、『ドクン。』と何かが心の中で動いたと同時に、無意識に駆け出すアタシの背後から、由美の声がした。

「ちょっ！ちょっと沙流！沙流ったら！こんな夜中にどこ行くのよ！」

その声は、アタシの耳に、届いていたものの、よろけながら、会社を出て駐車場へ出た。そして、自分の車に、滑り込むように乗り込み、キーを回す。エンジンの音が響き、アタシは車を走らせた。

□■□

沙流が会社を飛び出す数時間前、某病院。

部屋の中には、医者と看護師、そして、四十代くらいの男女が、並んで、腰掛けていた。

「先生、娘は・・・娘はいつ目を覚ますのでしょうか？」

声の主は、清楚な服装の女性。彼女の目の下には、隈がくっきりと残り、声も弱々しく、疲れ果てているようだった。

西日が差し込む診察室、女性の質問に、無言で難しい顔をする医者。少し開けられた、部屋の窓から吹き込む風が、カーテンを揺らしていた。

次に口を開いたのは、髪をきっちりとセットし、スーツを身に纏った、ガタイの良い男性だった。

「先生、黙っていないで、何か言って下さい。娘は、一体いつになったら、目を覚ますのかね。」

その言葉に、少し困った様子で首を振りながら

「・・・検査の結果だと、身体的には問題は全く無く脳波も正常です。いつ目を覚ましてもおかしくない状況なのは、確かなのですが。」

原因がわからない、そんな医者の言葉を遮るように、男性が、声を荒らげた。

「じゃあ・・・４か月も目を眠ったまま、目を覚まさない原因は何なんですか！」

すると、医者は、ため息を一つつき、静かに話し始めた。

「原因・・・ですか。あれから色々と調べてみた結果、一つの結論に達しました。それは、お嬢さんの心の中にあるということです。

」

「心・・・？」

「はい、娘さんが、ここに運ばれてくることになったのは、自宅で手首を深く切り、意識不明になっていたということでしたね？それは、死に至るまでの傷でした。幸い、発見が早かったのと、手術も成功して、傷も塞がり、一命はとりとめ、その後の回復も順調です。身体的にはまったく問題ありません。ですが・・・。」

「まだ何か？」

今度は、女性の方が、医者に、疲れた声で尋ねた。すると

「はい、自殺を図った。それはすなわち、『生きていこうとする意思が無い』ということなのです。先程も言いましたが、肉体的に全く問題はありません。しかし、目を覚まさないということは、こっちに戻ってきたくない、意識の中でそう強く思いこんでいる、そうとしか考えられません。」

「そんなことって・・・。」

「私は長いこと医者をやっていますが、こんな事例は初めてです。しかし、いくつか報告があるのです。ご両親、何か心当たりはありませんか？」

医者はそう言いつつ、じっと二人を見つめると、男性が口を開いた。

「心当たりも何も、家の事は妻に任せていたから、私は特に何も。

」

そこまで言うと女性を見て

「おい、原因はお前にあるんじゃないのか？」

そう言うと、声を少し荒げ

「そんなことあるわけないでしょ！私はいつも、娘のために最善を尽くしてたわ！会社に行く事しか、頭にしかないあなたはいいわよね。一歩外に出たら自由気ままなんだから。」

嫌味をたっぷりと含んだ言葉を返した、すると

「そういう言い方は無いだろ！俺が働かないで、誰が家庭を支えるんだ！自由気まま？そんなわけないだろ！毎日毎日、嫌な事があろうが、体が辛かろうが、一生懸命働いて、お前らのために、稼いでやっているのは、誰だと思ってんだ！俺の金で、家でのんびりしてるだけの、主婦と一緒にしないでくれ！」

「何よ！私だってね！」

男性の言葉を、皮切りに、お互い、相手のアラを、つつき合うような言い争いが始まり、どんどん怒鳴り合いに発展していった。その時

【ガンッ！】

金属を堅い物で殴った音が、室内に響くいた。その音に、喧嘩を止め、驚いた表情をする二人に、医者が静かに言った。

「・・・今、全てがわかりました。原因はお二方にあるようですね。」

□■□

とあるビル、その中の一室で、若い女社長は部下を集め会議をしていた。会社の名前は

『株式会社オレノ』

先代がバブル期に、小さな町工場から、日本屈指の一流企業まで、のし上げた、この会社は今や、精密機器製造は勿論、資本力を生かしてレストラン経営、レジャー産業から不動産斡旋まで一手に担うまでに成長したていた。

そして、会社を大きくするために、走り続けた先代が、この間、体を壊して引退したのだ。その後を継いだのが社長にしては若すぎる三十にも満たない一人娘だった。

最初、その若さから故の、経験不足を心配し、危惧したものの、彼女は、周囲の者の思惑とは裏腹に、キレ者だった。社長に就任するや否や、数カ月で、この不況の煽りで、近年、赤字を重ねる業績を、あっと言う間に、ひっくり返し、黒字に戻したのだ。

そんな彼女がある日、部下たちを集めての会議のこと。

「この度、我が社はホテル経営に、乗り出す事になった。今から配る資料を、見てほしい。」

凛とした声が、会議室に響くと、それを合図のように、控えていたスタッフが、集まった人間に資料を配っていく。
それが、手元に配られた人間は、黙ったまま、紙をめくり目を通し始める。会議が始まった時は、少しざわついていた会議室も、全員に資料が配り終える頃には、室内には、紙をめくる音だけが、響いていた。
その後、ややしばらくして、ホワイトボードを背にした、背の高い、女社長が、言った。

「みんな、一通り目を通してくれただろうか？それでは今から説明を始める」

と、一言言うと、集まった部下達に、今回の企画を説明し始めた。話の内容としては

・市内郊外、周りに家が無く、木々に囲まれた、眺めの良い高台に、バブル期に建てられ、崩壊と共に経営が破たんして廃墟になっているホテルがある。
・そこについて、色々調べてみたところ、すぐ側に渓流が流れ景色も上々、夜になるとそこから見下ろす夜景が美しいということも調査済み。
・ホテルが潰れた原因、それは前オーナーが、接客やレストラン経営のノウハウも知らずに、資本力に任せて建ててしまったため、バブル崩壊と共に、無駄に豪勢で、値段が高く、質の悪いサービスが露見して、客足が遠のいたためということ。
・場所が悪いわけではなく、質の高いサービスを展開すれば客足はつかめるだろう、その点については、我がグループが、培った知識をフルに活用すれば、データ上では問題なく経営でき、採算も取れる。
・駐車場についても、土地柄、ホテルに広い場所が確保できるた

め、車で来る客にも、アピールできる。
・そして何より幽霊が出るという、いわくつきの場所なため、土地代が二束三文だということ、幽霊騒ぎについては、未だ調査中だが、多分噂に過ぎないだろう、調査が済み次第、廃墟を取り壊し着工に移る。

大勢がいるにも関わらず、沈黙が続く室内に、女社長の凛とした声だけが、延々と響いていた。そして、一気に話を終えると

「・・・これで以上だが、皆の意見を聞かせてほしい。」

集まった部下達をジッと見ていた。すると

「問題ありません」
「私から言う事は・・・何も」

彼女より年上・・・というより、その場に居た、親くらいの年代の者達は、それに似た、内容の言葉を、口々に言うと黙って下を向いた。
そんな彼らを見つめる、女社長の瞳に怒りの色が灯っていく、そして腕を小刻みに震えさせたその次の瞬間

【ガンっ！】

っと、音がした。彼女が後ろにある、ホワイトボードを拳で叩いた音だった。
突然の大きな音に、ハッとした表情を浮かべる、集まった部下達。
そんな彼らに、怒気の孕(はら)んだ声で、女社長は怒鳴った。

「本当に何も無いのか？本当に、何も無いんだな？・・・ったく、

どうして、お前達どうしていつもそうなんだ？何で意見を言おうとしない、心の中では『どうだっていい、後は乗っかるだけだ』なんて思ってるのが見え見えだ！それにしても、どういう基準で父は、こんなのを重役に据えておいたかな。いいか、一昔前は、黙っていても業績が上がったらしいが、今の時代、知恵を振りしぼらないと、この先はないぞ！わかってるのか？」

その言葉を皮切りに、すごい剣幕で怒鳴り散らす女社長の声だけが、室内に響いていた。一方、集まった重役達は、こわばった表情で下を向いたままだった。

散々、罵声を浴びせた後、何かに気づいたように彼女が

「うん・・・？」

声を上げると、頭をもたげ、遠くに呼びかけるように言った。

「奥で作業をしている、そこのお前達！」

視線の先には、作業着を着た、二人の若い男が居た。彼女の声で、呼び掛けられていることに、気づいたのか、鉢植えを抱えたまま、こわばった表情で、立ち尽くしていた。

「俺・・・いや、私達の事ですか？」

最初に、戸惑った声を出しつつ、口を開いたのは、二人組の片割れ、小太りの男だった。その横には、痩せた、長身の男が、突然のことに、引きつった表情をしていた。それに女社長が

「あぁ、そうだ、それでだ・・・お前達に訊きたい、どうだ？この企画にどこか問題は無いか？そこで作業しながら、ずっと聞いて

いただろ？今の話。」

突然始まったやりとりに、重役たちが後ろを振り返った。その視線を一身に浴びながら、小太りの男が言う

「あ、いえ、聞き耳を立てていたわけじゃないので、私からは何も。たまたま作業に時間がかかって、ここに居てしまっただけのことですので。」

すると今度は、細身で長身の男が

「気分を害されたのでしたら、すみませんス、もう作業は終わったっスから出て行くスから。」

そう言うと、慌てた様子で、そそくさと、出ていこうとする二人組を、制するように女社長は言った。

「私は出て行けとは一言も言っていない、意見を訊きたいと言っているんだ。」

すると、小太りの男が

「しかし・・・我々は、会議に対して、意見する立場ではないですし、それに、社員ですらありません。ただの派遣です。そんなおこがましいことは・・・。」

その言葉を聞いた途端、女社長は、その言葉に『フッ・・・。』と吐き捨てると、冷たい笑みを浮かべ

「派遣だろうが、なんだろうが、この場に居たんだ。多少なりと

も、意見の一つくらいは、あると思っていたのだがな。やはり、お前達も、コイツ等同然、肩書きだけは、立派だが、全く役に立たない人間と、一緒なのか。まぁ、社員、しかも重役でこうなんだ、所詮、定職に就けない派遣なんて、クズみたいなものか・・・。いや、すまなかったな。変なこと聞いて。」

彼女は、派遣の二人に、明らかに、馬鹿にした態度を取った。重役達が、二人を見守る中、そのまま立ち去るかと思われたその時、小太りの男は鉢植えを、ゆっくりと床に降ろて、静かに言った。

「・・・その言葉、いくら社長とはいえども気に食いませんね、撤回していただきたいですね。何なら、私の意見、聞いてもらえますか？」

そして、鋭い目付きで、社長を睨みつけた。すると

「ほう、面白い、聞かせてみろ。」

その言葉に、冷たく言う女社長。

「えぇ、さっきの企画、アレで終わりですか？だとしたら、私が思うに、不十分ですね。なぁ、シマよ。」

なじられたのがよほど悔しかったのか、広めの室内だったが、堂々とした声で言った。

「面白い、どこに問題があると？」

するとさっき、シマと呼ばれた男が

「作業に時間がかかってしまったもので、聞くつもりはなかったんスけど、内容は、丸聞こえでしてね、ブチさんと、喋ってたんスよ、いいスか？この会社が多角経営をしてることは知ってるッス、中の施設については、問題ないんじゃないスかね。でも、車で来られない人とかは、どうするんスかね？だって聞いたところ、そこって、山の中にあるんスよね？しかも元が廃墟ならバスだって通ってないはずっス、車を持ってない人とか主婦層とか、自力で来れない高齢者層とか、どうするんスか？それに、ちょっと気の利いたホテルならやっている、日帰り入浴は出て来ないし、さっきの話の中じゃ、そこら辺のことには、触れられていなかったっスよね？」

「そうですよ、都会育ちで、何不自由なく、ぬくぬくと育ってきたお嬢さんだからですかね。高齢者や車を持っていない人の事が全部抜けてる、それに、みんながみんな、ホテルにおいそれと来れるわけじゃないんですよ。日帰り入浴に、ランチをつけたり、細かく稼ぐとか、そういう頭は無いんですか？話の内容を聞いて思ったんですが、社長って、自分の経済観念で、物を考えているように、見受けられました。しかも、さっきの私達に対する発言もそう、何だかんだ言って、普段からカネ持ってない人間を、見下して生きてるんでしょ？私達は、あなた達から見たら、定職にも就けない、その日暮らしのクズかもしれませんが、自分の中の、狭い世界でしか、物を考えられないっていうのは、どうかと思いますよ。」

派遣二人の、とんでもない発言に、彼女の怖さを知っている重役達が凍りついた。

場の皆が思うことは、ただ一つ、嫌味を言われた女社長が、怒鳴り出し、そのしっぺ返しが、自分たちに来る、そのことだけだった。しかし・・・

「フフ、フフフ・・・アハハハハハ！」

その思いとは裏腹に、突然、女社長は大笑いを始めた、そして涙を拭きながら言った。

「全くその通り！私は世間知らずのお嬢さんさ、よくぞ意見を言ってくれた、礼を言う、そしてそっちのヒョロっとした彼が言った通り、ちょっと考えれば、わかることを、色々と仕込んでおいたのさ。良く気づいてくれたな。それに引き換えお前達ときたら・・・。」

重役達に向き直すと、また、いつの間にか、冷たい顔に戻った彼女が

「普段、業務に関係無い者が、話を聞いていただけでわかることを、どうしてわからない？さっき、お前達、何て言ったか覚えてるか？『何もありません』だとさ、全く、呆れてしまうな。この会議で一つ、はっきりとわかったことがある。まぁいい、今回の会議はこれで終わりとする。」

そう言うと、女社長はツカツカと出口に向かって歩きだした。そして、振り向きもしないまま。

「来季の人事異動、とても楽しみだ、それと・・・そこの派遣の二人組！ちょっと私の所へ来い。」

そう、吐き捨てるように言うと、会議室を出て行った、その後、重たい顔をしながらその場を動こうとしない重役たち、そして

「なんかヤバいことになったスね」

「ちょっと煽られて言いすぎたかもな、ハハ・・・。」

引きつった笑顔で固まったまま、派遣二人が、彼女の出ていったドアを見つめていた。

□■□

場所は変わり、会社から程近い個人経営の居酒屋、『陽だまり居酒屋ポッケ』そこに女社長、さっきの派遣の二人組が居た。
小さな店の奥にある、小さいテーブルがある、小上がり、彼女と向かい合うように、男二人が並んで座っている。
メニューを眺める社長の目を盗み、長身で、細身の男が、小太りの男に、ヒソヒソと話していた。

「いやー・・・ブチさん、さすがに昼間は焦ったスよね、突然、社長室に呼ばれた時は、クビを本気で覚悟したス。」

「そうだよな、でも部屋に入るなり『ちょっと付き合ってくれないか？』って言われて、付いてきたら居酒屋だもんな。社長直々に連れて来られるとはこっちの方がびっくりしたよ、でも、何言われるかわかんないぞ、酒の勢いに任せて、昼間の事をグチグチと、言われるかもしれないから、気を付けないとな。」

ボソボソと喋る二人に、女社長はメニューを少し下げ、二人を睨みながら

「お前達、丸聞こえだぞ、ヒソヒソ話ならもっと小声でやるもんだ。・・・まぁいい、とりあえず何か頼もう・・・ビールでいいよな？」

とはいえ、目の前の彼女は、少し、柔らかい表情をしている。社

内に居る時とは別人のようにも見えた。彼女の提案に、無言で頷く二人を見て、手を上げると

「フェデさん、すまない。こっちにビール三つ。」

すると、カウンターの中に居た女性が「はぁい」と声を上げ、フェデさんと呼ばれた女性が笑顔でやってきた。そんな彼女は、身長の低さと、ボブに切りそろえたショートカットのため、子供にも見えた。そんな彼女が、三人に元気の良い笑顔を向け

「はいはい、それにしても、いつも一人で来るのに、連れが居るなんて珍しいわね。」

彼女は社長の事をよく知っているのだろう、温かい声を出す『フェデ』と呼ばれた女性。それに、普段は見たことのない、柔らかい表情の社長が答えた。

「私だって、たまには同じくらいの人と、飲んだりしたいのさ。」

そんなやりとりをしていた、そこにはいつもの何か張り詰めていて厳しい顔をした女社長ではなく、良く見ると、綺麗な顔立ちをした、年頃の女性がそこには居た。

「それにしても、『フェデ』って名前、珍しいスね？社長の古い友達スか？」

派遣片われ、長身の方が言った、それに

「いや、ここだけの付き合いだ。『フェデ』っていうのは、彼女

のあだ名みたいでさ、私が、ここに通い始めたころには、既にそう呼ばれていたから、それに倣(なら)ってるまでさ。それはそうと、お前達を呼んだのは、ただただ酒を飲むためじゃないんだ。」

そう言いつつ、女社長はじっと二人を見つめた。すると

「わかってるっス、昼間の件の事っスよね？」

「そうですよ、俺達は、ただの作業員で、派遣ですよ。」

とはいえ、はっきりとした理由がわからず、戸惑いの声を出す男二人に、彼女はため息を一つつくと、小さく言った。

「私が、父から会社を継いで、約一年、痛いほどわかったんだ。お前達も見ただろう？あの連中を、彼らは、会社の要となる重役なんだ。会社の舵取りをしなきゃいけない立場なのに、本気で会社のことなんて、考えちゃいないってことをさ。私が父から会社を継い頃、あの者達のせいで、会社は危ない状況だったんだ。ただ漫然（漫然）と、業務をこなすだけ、当たり前の結果さ。私から言わせたら、ただの置き物と変わらない。今回の件だって、お前達も見ただろう？あの有様さ、それに引き換え、お前達はあの状況で考え、そして、社長である私に、真っ向から意見してきたじゃないか。久々に、涙が出るほど嬉しかった。けどな、あの者達の、気持ちもわかる。私が就任当時、結構、強引な人事をしてきたせいで、私のことを、恐れているのか、何も言わなくなってしまってさ。とはいえ、今の状況は、十数人の、考えない置き物よりも、考える無礼者の方が、この会社には、必要だってことさ。」

そう言うと物憂げな表情をして、悲しげなため息をついた。

「そうなんスか・・・」

「色々大変なんですね、社長ってのも。何かすみません、昼間のことは、謝ります。酷いこと言って、すみませんでした。」

と、その時、さっき『フェデ』と呼ばれた小柄な女将さんが

「はいはい、お待たせ、ゆっくりしていってね♪そして今日のオススメ、旦那が、生きのいいの仕入れてきたから、じゃんじゃん食べてって。」

元気な声でビールを持ってきた。

「あぁ、ありがと」

女社長が、笑顔で受け取り、三人で乾杯をした後

「それでだ、本題に入るぞ、あれ？そういえば・・・まだ名前を聞いて無かったな」

そう言いつつ二人を見つめた、すると長身の男が

「自分は島田、２４ス、隣に座ってるブチさんからは、『シマ』って呼ばれてるっス。」

それに続くように、小太りの男が言った。

「俺は小渕です、さっきからシマが言ってる『ブチさん、ブチさん』ってのは俺のことです、ちなみに２８です。」

めいめい、二人が名乗った後、女社長が

「最後に私だな、私は会社名のままの名前で折野、歳は・・・27。昼間は上から目線で怒鳴り散らしてしまったけど、小渕さんは年上だったんだな、『お前』なんて言って悪かった。」

そう言って頭を下げた、するとブチが

「止めてくださいよ、社長から『さん』付けで呼ばれるなんて、恐れ多いです、気軽に『ブチ』とでも呼んで下さい。」

慌てた様子で、頭を下げる、折野社長に言った。すると

「それにしても、『シマ』に『ブチ』って、何だか模様みたい、いいコンビね。」

クスクスと笑っていた、折野社長だったものの、すぐに、真顔に戻り

「それでだ、本題に入る、いらない御託はこの際省くぞ、単刀直入に言うと、あの廃墟ホテルに、一度行っておきたいんだ。それも夜、日が落ちた後だ。」

その言葉に

「ええっ！」

「本気スか！？」

驚くブチとシマ、それをよそに続けた。

「本気だ、あのホテル、あんないい所に建っているのに、あの物件には、夜景を見渡せるラウンジが無かったんだ。今度建てるのに

は、それを作りたい。しかし、どの角度に作るのがベストなのか・・・が、わからないんだ。こればかりは、建物を壊す前に、現場に行って、自分の目で見て確かめないとな。幸い、屋上には出ることが出来るみたいだしな。」

「しかし・・・あそこは出るって評判ですよ？」

「そうっスよ！噂では、霊道が通ってるとか、頭半分しかない子供の幽霊を見たとか、噂が絶えないスよ？」

男二人でも、さすがに夜行くのは嫌なのか、尻ごみする二人に

「さすがに私も、一人では怖いんだ。だが、大勢で行くわけにもいかないだろ？今にも朽ち果てそうな建物なんだ、大勢で行ってみろ、重さで床が抜けたりしかねないんだ。それに、うっかり怪我人でも出してみろ、それこそ企画自体、白紙に戻る、だから少数精鋭、言い方は悪いが、自由のきく、派遣のあなたたちだから、頼めることでもあるんだ。でも、人選の理由は、それだけじゃない。昼間、突然、話を振られても、その状況で切り返してきただろ？咄嗟の時にも、柔軟に、対応の出来る、頭の柔らかい人間が必要なんだ、頼む！」

そう言いつつ、深々と頭を下げる折野、男二人はビール片手に沈黙が続いた。そしてブチが少しため息をつきつつ静かに答えた

「・・・わかりました、社長にそこまで頭下げられたら断れないよな、シマ」

意を決したように頷き隣のシマを見た、すると

「女の子に頭下げられたら男として行かないといけないスね、でも・・・残業手当、ちゃんと割り増しでくれるんスよね？」

悪戯に笑いながら言うシマ、そんな彼にブチが

「バカ！今はそんな話する空気じゃないだろっ！」

【ごんっ！】と頭を叩いた

つづく

その5

車のルームミラーに、何かを叫んでいる、由美が映った。
何を言っているかは、想像がつくけど、それどころではない。『彼らの拠り所が解体される』。早くこのことを、知らせないと。そんな想いだけで、アタシは、車を、めいいっぱい早く、走らせていた。
会社を出てから、車を飛ばして約5時間。やっと、ホテルへと続く、山道の下まで着いた。そしてふと時計を見る

「午前二時十三分・・・か、バリバリ『丑三つ時』じゃんね。肝試しなんか、するつもりもないのに、こんな時間に、足を踏み入れるとは、思ってもみなかったわ。」

一人呟いた。確かに、ゴローのことや、ミサっていう女の子のことは、気になるが、何でアタシってば、ここまで必死になってるんだろ？幽霊なんて、金輪際かかわり合いには、なりたくないと思っていた。それでも、何か引っかかるものがあり、放っておけないのも確かだった。
ゴローやミサは、ホテルが取り壊されそうになってることなんて知る由も無い。会社で見た、記事の内容から、ここが取り壊されるまで、時間はあまり無いみたいだし、耳に入れておくだけでもしてあげないとな。
意を決して、うっそうとした木々が生える、悪路を高台に向けて走った。
しばらくすると、開けた所に出た。その時、目の前に3ナンバーのＲＶ車が停まっているのが目に入る。

「先客？もしかしたら・・・」

反射的にハンドルを切り、ＲＶ車から、死角の位置に、車を隠すように停めた。とはいっても、ここは元ホテルの駐車場。物陰など無いため、気休めくらいにしかならない停め方だが、女の勘がそうさせていた。

「あの車の持ち主が、そうだとしたら、何か知らない内に、えらい急展開になってるわね。ってゆうか、あの記事って、確か三日くらい前だったはず、えらくフットワークの軽い会社だこと。」

ドアを音を立てないように、そっと閉め、停めてあったＲＶ近づき、ボンネットを触ってみる。

「まだ温かいわね、ってことは、来たばっかりか。車の中は・・・と、飾りらしきものは、特になし・・・と、あ、やっぱり思った通りだ、これ、会用車ね。」

自分の勘が、正しかったことを確信した、それと同時に、まだ近くに居るかもしれない。

そうなると、出来るだけ、物音を立てないよう入口に向かわないとな。その後、建物に入る扉をそっと開け、一歩入ると、月明かりが荒れたフロントを映し出している。

「懐中電灯は・・・点けない方がいいか、とりあえず、ゴローに会わないと。」

ガレキを避けつつ、ゆっくりと歩きだした時、すぐ後ろから声がした。

「・・・ねーちゃん、こんな夜中にどないしてん。」

ボソボソとした喋り方だったけど、確かにこれはゴローの声だ。
声の方に、振り返るものの、誰も居ない。確か以前、会った時は、薄暗がりでも見えていたはずなのにな、そう思いもう一度呼びかけた。

「ゴロー？どこに居るの？」

すると

「今、姿を消してて、ちょっと待ってな。」

声とともに、ボーっと熊の幽霊が現れた。初めて会った時と、全く同じ格好をしている。頭が半分白骨化し、両腕が朽ち果て、内臓が飛び出た姿だ。
さすがに、襲って来ないとはわかっていても、これは気持ち悪い。なので

「いきなり臨戦態勢じゃない、ってゆうか気持ち悪いからちょっと元戻してくんない？」

小声で言うと

「それはでけへん。今ここに侵入してる奴らは、ここ取り壊そうとしてるらしいんや。今、仲間に声かけてな、あっちこっちに配備しててん。ちなみにワシは、ここ担当や、それにな・・・もう、アイツらは、ここから出されへん。いざとなったら刺し違える覚悟や！」

静かに喋ってはいるが、彼が、苛立っているのがヒシヒシと伝わ

ってくる。

「・・・ゴロー、気持ちはわかるけど、これからアタシの言う事を良く聞いて。まずはここに来た人間、閉じ込めたり、危害を加えたらダメよ。」

「何でや！なんやかんや言ってても、姉ちゃん、あいつらの味方なんやな？ほなら一度はやられてるとはいえ、容赦はでけへんで！」

いきり立ち、アタシに威嚇してくる、ゴローの頭に、お得意のアイアンクローを一発かまし、顔を近づけ、小声ながらも一喝した。

「ここをまとめる管理人が、そんなんでどうすんの！とりあえず、落ち着いてアタシの話を聞きな！」

「グアッ！いきなり何すんねん！ちょっ！ワシ、本気で消えてまうがな！」

慌てた様子でジタバタするゴローを、睨みつけながら言った。

「いいこと？そんなことしても、何にもならないのよ、まぁ、アタシが何も説明しなくても、状況が把握出来てるみたいだから、手間が省けて丁度いいわ。でもね、もしかしたら、視察しにきただけで『やっぱやめた』ってなるかもしれない。万が一、怪我させたり行方不明にでもしてごらんなさい、大事（おおごと）になって、静かに暮らす所じゃなくなるかもよ？」

「せやかて・・・」

「そういえば、アンタさっき、『あっちこっちに配備して』って

言ってたわね。それじゃあ効率が悪いわよ、とりあえず一部屋に集めなさい。それと、さっき来たっていう人達、この辺には居ないってことは、どこ行ったの？」

「屋上や、他の所には目もくれず一直線に向かっててん、多分ここの構造は知り尽くしてんやろな、それに、一か所に集めるって何でや？」

「そう・・・それは好都合ね、いい？さっきのアンタの話から察するにその人達の目的は多分屋上、あっちこっちに配置しても、多分、他の階は全部スルーされるわよ。それにアンタ達、人間には触れないんでしょ？さすがのアンタだって、三人相手するのは無理だって薄々わかってるはずよ。だから一点集中、侵入してきた人間が、帰る時に、どこかの部屋に誘いこんで、メガトン級の恐怖を味あわせて逃がす、もうここには来たくないと思わせるくらいにね。」

「で、どないすんねや？」

ゴローの問いに、少し考えた。作戦の方向性は、決まっているものの、さすがのアタシも、後はノープラン。

考えろ、考えるんだ。・・・ん？そういえば、この前、ゴローや、ミサに脅かされてから、それ系のサイトを回っていたときに、かなりびっくりした画像があったな。

と、なると、後は場所か、あれ？そういえば・・・。

「とりあえず、アンタの仲間に力持ちさん。いや、物を動かすことが出来る人って居ないの？ホラ、幽霊ったら、者を動かしたり、宙を浮かせたり、ホイホイ出来んでしょ？ほら、ミサちゃんだって、重たいカート押してたじゃんね。」

「ミサちゃんはあかんて、とはいえ、何人必要なんや？」

「すぐ終わる作業だから、一人居れば十分よ。あ、アンタやんなさいよ。」

「アホか。さすがのワシとて、ほいほい物を動かすのは無理や。それに、みんななんだかんだで、どっかこっか体の一部が欠けとるさかい。・・・って、そういやおったわ！確か2階におったな、ちょっと呼んでくるわ！」

そう言うと、目の前からゴローがスッと消える。と、思えばすぐに、ゴローの声がした。

「連れてきたでー、ワシらの中で一番の体の丈夫な・・・って死んでるから語弊があるか、とりあえず、物動かすにはうってつけのヤツや。」

その方を見ると、旧日本兵の軍服を着た、大きな男性が、ゴローの後ろに居るのが見えた。

「ここに流れて来た時にはすでにな、死んだ時のショックで、本名忘れとったみたいやから、呼ぶのに不便やて、とりあえずで、名前は見た目でつけててんけどな、『大熊』言うんや、動きがのっそりしていて熊っぽいのと、ワシよりデカいさかい、んでとりあえずでそう呼んどんのや。」

確かにデカい、浴衣を着ていたら、関取と間違えるような風体、しかも、ゴローよりも頭1個は軽く大きい上、胴回りも相当なものだ。抱きついても、腕を回すのは、無理だろうな。

体格だけ見ると、彼に凄まれたら、並の人間なら腰を抜かすだろ

う。でも良く見ると、死んでいるにも関わらず、ニコニコしていて、人の良さそうな顔立ち、今来ている侵入者に対抗するには、ちょっと決定打に欠けるわね。やっぱり最後の砦はあの子しかないか、彼を見ながら思案していると

「で、どないしたらええんや？姉ちゃん、何か考えがあんねやろ？」

「そうね、まぁ、時間もあまりないだろうし、コレに賭けるしかないんだけどさ、アタシが落ちて気絶してた、1階のあの部屋の場所、あそこを使うの。」

「あぁ、天井に大穴が空いてるあの部屋やろ？」

「そうそう、それと・・・ここの住人とやらは全部で何人居るの？」

「せやなぁ・・・軽く四十くらいや、動物霊も合わせたらもっと居るで。」

「そう・・・丁度いいわ、とにかく、アンタが呼びかけて、三十人くらい、その部屋の真上に待機してもらって。穴をグルっと囲むようにね、それと残りの十人、両隣の部屋に配備して、そして大熊さん」

そう言いつつ、軍服の彼に言うと

「おー、第五小隊軍曹の大熊でぇーあります。なんなりとご命令をー。」

ゆっくりとして、間延びした喋り方とは似つかわしくない、ビシっとした綺麗な敬礼をした。

「命令・・・って、いや、いいんだけどね。一階のあの部屋、確か何もなかったのよ。とりあえず、フロントに、うち捨てられた椅子が、何脚かあるんだけど、五～六脚あの部屋に転がしておいて。それが終わったら、一階のその部屋以外を調べて、開くところがあったら、ガレキや何かで、封鎖してちょうだい。大熊さんには、かなり働いてもらうことになるけど、アタシも手伝うから、なるべく迅速にね。そして・・・屋上に上がっていた連中が、階段を下りてきたら、上からは困熊さん、下はインパクトのある、ミサちゃんで挟み打ちにして、あの部屋に誘い込む。うまくいったら、ゴローは天井に配備した、みんなの音頭を取ってね。それに大熊さん、もうちょっとこっち寄って」

ゴローの少し後ろに控えていた困熊さんに手招きをすると

「どないするつもりや」

ゴローが困惑した声を出した。それもそのはずだ、うまく行く保証は無い。でも、もう時間が無い中、これが一番最良の方法だと信じるしかない、そう心に決めて、ノシノシと、歩み寄ってきた困熊さん、ゴロー、二人の耳元で囁く

「・・・と、いうわけでね」

アタシの言葉を聞いて、無言で頷く大熊さん、そしてゴローは

「へぇ・・・うまいこと考えるやんか、後はミサちゃんやねんけど・・・」

「どうしたのよ」

「あの子なぁ、アンタの一件から、人間をよう怖がってまって、あれから、こういう事には参加せぇへんねや。」

やれやれ・・・とため息をついた。

「しょうがないわね、元はといえば、アタシが撒いた種・・・か、時間も無いし、説得してみるわ、もしかして、まだ五階のロッカールームに居るの？」

「ちゃうねん、嬢ちゃんなら『人間の側は嫌やー』言うてホレ、アイツ等が屋上へ上がっていった時に、入れ違いのように下に降りてきてな、ホラ、すぐそこの部屋におんねん」

そう言いつつ、アタシが立っている、すぐ斜め後ろの部屋を指差した。

「・・・そう、それじゃあ時間も無い事だしアタシが説得してみる、その間にゴロー、そして大熊さん、任せたわよ」

二人に言うと、それぞれ作戦通りに動くがごとく、目の前から消えるゴロー、そして

「おー、とりあえず椅子を運んでしまうぞー」

足音は聞こえないものの、大きな体を揺らし、フロントへ向かう大熊さん。それを目で追いつつ一呼吸置いて、ミサの居る部屋のドアノブに手をかけた。

「・・・後は、ミサちゃんか」

一人呟き部屋に入る。暗い所に長く居たため、懐中電灯無しでも、何となく部屋の様子がわかった。

ここは元、日帰り温泉客用の、休憩室だったのだろうか、畳がささくれ立ち、かなり荒れている。

そして、ガランとして、何も無い部屋の隅に、膝を抱え、うずくまる人の影。多分ミサちゃんだ。そっと近づき、彼女を刺激しないように、なるべく優しく、そして出来るだけ静かに声をかけた。

「・・・ミサちゃん」

自分なりに、かなり気を遣って言ったんだけど、突然話しかけられたことに、びっくりしたのか、ビクっと体を震わせ、顔を上げた、そして、アタシの姿を見るなり

「ヒッ！」

まるで、幽霊に遭遇したときのような、恐怖が混じった声を出した。

「いや、あのさ、この前も言ったけど、その驚き方、本来は生きているアタシが言う言葉だからね。幽霊に怯えられるなんて、ちょっと傷つくわよ。と・・・まぁ、こんな話をしている場合じゃなかったわ、あのね、頼みたい事があるのよ。」

見知った顔だからだろうか、最初目を見開いていたものの、徐々に落ち着きを取り戻し、再び俯いた。

そして膝の間に顔を埋める、お決まりのポーズをすると、ボソボ

ソと喋りだした。

「・・・何ですか？あなたはこの間、言ったじゃないですか、『もうここには来ない』って。何で居るんですか？」

「確かにね、この間言った通り、もうここには来ないつもりだった。でもね、状況が変わったの、アンタも知ってるでしょ？今、ここに来ている人達の事、そして目的も。」

アタシの言葉が、聞こえているのか、聞こえていないのか、ミサは何も言わなかった。それでも伝わっていると信じて、続ける。

「このまま放っておくと、みんなの居場所が無くなるの。それを何とか阻止したい、それにはどうしても、アンタの力が必要なの。アタシの為じゃない、ここに居るみんな、そして皆のことを見守ってくれているゴローのために、ちょっとだけ力を貸して欲しいの。この意味、わかるわよね？」

静かにミサに語りかける。その間中、ずっと膝に顔をうずめ、話が終わってもピクリとも動かないミサ、そのために、がらんとした部屋には、沈黙の時間だけが、流れる。

アタシは待った、ここでしつこくしても、逆効果になるだけだ。

無言のまま、ミサの、綺麗に切りそろえられた髪を、見つめていると、不意にミサが顔を上げ、アタシを見た、目にはいっぱい涙を貯めている。そして

「私に、何が出来るって言うんですか？私なんかが、出て行ったところで、何も出来ない。どうせ、手をこまねいて見ているだけ、ここは壊される運命なのよ！私は・・・別に、ここを追い出されてもかまわない。またどこかに行けばいいだけのことだから！」

嫌いなアタシの前だから、精一杯強がっているのか、声を荒げるミサだった。
とはいえ、口ではそう言ってはいるものの、やはりここに居たいのだということが、その短い言葉から、十分すぎるほど、伝わってきた。
アタシは、ミサの横に、ゆっくりと腰を下ろしながら言う。
「いい？人ってのはね、いいえ、幽霊も一緒、選択を迫られた時、選ぶのは『やる』か『やらない』か、二つしかないの、どうせなら動きましょ？やらないで後悔するより、やって後悔した方がなんぼかマシじゃない。これから成仏するまで何年、いや何十年、もしかしたら何百年かもしれない、仮に失敗して、ここを追われることになったとしても、黙って追われるのと、精一杯やりきるのと、どっちがいい？」
「・・・それは。」
ミサの顔に動揺が見られた、彼女の心に変化が現れている、もうひと押しだ。
「もう一度言うわ、今は『やる』か『やらないか』二つに一つ、でもね、今回のピンチを、乗り越えるためには、今、入り込んでいる人達を、死ぬほど怖がらせて追い払う、それが必要なの。それが成功するか否かは、アンタにかかってる。とても重要な役割を頼む事になるけど、大丈夫。ミサちゃん、アンタならやれる、この間、この無敵のアタシを、死ぬほど怖がらせたんだ、自信を持って！」
アタシが喋っている間、ミサは無言で、アタシを見つめていた。瞳が大きく見開かれ、一瞬何かを決心したように見えたものの、再

び視線を落とし、ボソボソと喋り出した。

「さっき・・・ゴローさんにも頼まれた。でも、もし私なんかが出て行って、ダメだったらみんなの期待を裏切ることになる、そんな目にあうなんてもう・・・嫌なの！」

俯いたままで、表情はよく見えなかったけど、明らかにミサの声は涙が混ざっていた。生前、何か大きな期待をされていて、それに応えられなかったことが、死んでしまった今でもなお、そのことが胸に引っかかっている、その気持ちが痛いほど伝わってきた。

言葉を聞いているうちに、アタシは、憎まれ口を叩くミサが、愛おしくなり、思わず頭をくしゃくしゃと撫でていた。

すると、触る事の出来ないはずの、髪の毛の感触が手に伝わった。

一瞬、驚いたように、体を震わせたけど、ミサは、なすがままにされていた。そして、そのまま、ゆっくりと体を引き寄せると、アタシにもたれかかってきた。

「大丈夫、気持ちを強く持って、失敗を恐れたらダメなのよ。仮に、失敗したとしても、ゴローや、他のみんなは、絶対アンタを責めないし、アタシが責めさせない。今回、勇気を持つことで、この後、結果がどうあっても、実体が消えた後も、その気持ちは、魂にちゃんと刻み込まれるの。決して無駄にはならない、わかるでしょ？」

小さな肩を抱きしめる、アタシの腕の中で、ミサの嗚咽が小さく聞こえた。その時、体がうっすらと光を放つ、そういえば、触っちゃいけないんだった！

「うわっ！そういえばアタシが触ると消えちゃうんだったっけ！ごめんっ！」

飛び退くように離れる、すると

「ううん、何か大丈夫みたい。あなたの体に触れたとき、何となく感じたんだ。うまくは言い表せないけど、懐かしいような、昔どこかで感じたような感触・・・私、死んでいるはずなのに・・・何か変よね。」

そう言うとスッと立ち上がり、アタシを見ると、ミサが言った。

「ねぇ、私は何をすればいい？」

その彼女の目には、何かを決心したのだろう、迷いが消え、強い光がともっているようにも見えた。それを見て思う、もう大丈夫、ミサはやってくれるだろう、そして

「あのね・・・」

耳元で作戦の内容を伝える、すると

「・・・わかった。」

さっきまでの、ボソボソとした喋り方ではなく、はっきりとした言葉で言うと、部屋から出て行った。

つづく

その6

廃ホテルの屋上、周りに何も無い空間で、風に吹かれ眼下の景色を眺めた。あまりの綺麗な夜景に思わず

「きれい・・・予想以上だわ・・・」

一人呟く、と、その時、少し後ろに居た、ブチとシマが、寒いのか、身を寄せ合いながら

「社長、もう帰りましょうって！もう冬になるのに、こんなところに長居したら、風邪ひいちゃいますよ。それにここ、何か居る気配がビンビンするんですよ。いや、霊感とか強いわけじゃないんですけど」

「そうっスよ、自分も何かビンビンきてるのがわかるっス、もうここに来てからもう結構時間が経ってるじゃないっスか、もう角度とかそのへんの事はキレ者と言われてる社長ならもう把握出来てるはずっス、もうこの辺にして帰りましょうって！」

寒いことが原因なのか、それとも周りの雰囲気がそうさせるのか、二人はカタカタと震えていた。そんな怯えた声を出す彼らに

「ブチ・・・それにシマ、すまない、もうちょっとだけ、今ここには夜景と私達だけ、この綺麗な景色を見てるとな、その間は、色んな嫌な事を、忘れることが出来るような気がするんだ。だから、もう少しだけ、少しだけでいいんだ。」

振り向きもせず、眼下の夜景を見つめながら言うと、ブチが

「わかりました、お付き合いしますよ。何だか知らないけど色々あるんですね。私達は、午後からの出勤ですけど、社長はまた、早いんですよね？心配しないで下さい、帰りは私が運転します。何なら寝ててもかまいませんから。」

ため息混じりに言っている。そんな彼に

「すまない、ブチ。お言葉に甘えようかな。」

そう返した。何だろう、外見的には、ちょっと太ってるし、別に格好良くもない、でも、そんな彼の声を聞いていると、何故だか安心出来て、素直な気持ちになれる。

何かこう、幼馴染というか、懐かしい感じを、彼に感じていた。

すると

「でも、大変ですよね、社長って仕事は、ここに来る間の話で、色々と覆されたようなきがしますよ。」

再び、ブチの声がした。そして

「そうスよね、俺達のイメージする『社長像』って、高級クラブで、女の子侍らせて、ガハガハ言いながら、好き勝手してるか、ゴルフに興じてるか、そんな感じッスもんね。」

続けてシマが言う。

そうだよな、やっぱりそんなイメージだろう。あの重役達だってみんな、そう思っているんだろうな。

「バカたれ、私は女だ、クラブにも行かないし、ゴルフだってしないんだ。そんな余裕があったら、会社をいかに存続させるかに、

時間を割くさ、それにな、大概社長ってのは、みんな真面目に働いてるぞ。」

「わかってますって、その化粧っけの無さを見たら、遊んでいるようには見えないスもんね。今度、勝負の時には、メイクしてあげますよ、こう見えても俺、一時期、メイクアップアーティスト目指して、学校通ってたっスから。」

「・・・意外だな。」

「人は見かけによらないって、このことっス、社長なら、俺がちょちょっとやれば、すれ違う人が、振り向くくらいに綺麗に仕上げてみせますよ。改めて見ると、結構美人なんスよね、社長って。背もあるし、それに、胸もあるし。」

「なっ・・・！？」

突然のシマの言葉に固まっていると、ブチが

「だーかーらー、お前は、どストレート過ぎるんだよ。ちょっとは相手見て言葉選ぼうな。」

そう言いつつ、シマの頭を『ゴンッ！』っと叩いた。

■□■

それからしばらく、三人で夜景をその目に焼き付けた。そして、ふと腕時計を見る。その、小さな文字盤は、午前三時半ちょっと前を指していた。

もう、ここに二時間くらい居るのか、そろそろ戻らないといけないか。両脇に居る二人に声をかけた。

「・・・ブチ、シマ、そろそろ帰ろっか。」

すると、私の言葉に、二人はホッとした表情を浮かべつつ

「そうですね、帰りましょう。」

「さっさと車に戻るっス。」

ゆっくりと、建物に続く鉄の扉前に達、ノブに手をかけ引っ張った。すると

【ギギギ・・・ギ・・・ギィィィィ】

錆びているため、このような音がするのは当たり前のことなのだが、場所が場所なため、余計恐ろしく感じる。そう思うのは私だけではないのか

「社長、やっぱ気味悪いスね、この音・・・」

シマが不安げな声を出すと、そんな彼に、ブチが口を尖らせ少し怒ったように言った。

「こんな時にそんな事言うなよ、余計怖くなる、とりあえず黙って出口に急ぐぞ」

そう言うブチも、やっぱり怖いのか、少し震えているように見えた。

冷静になって思うと、真夜中、世間一般で言われるところの『出

る』時間なのだ。しかも、いわくつきの廃ホテルのど真ん中に居るのだ。
私は、霊なんて非科学的なものは信じていない。とはいえ、ボロボロに朽ち果てた、この真っ暗な空間は、私達に『恐怖』という概念を植え付けるには十分すぎる程だった。
思わず足がすくんだものの、朝一までに、会社に戻らねばならない。グループ会社の報告の書類の山が、私を待っているのだ。
をれを思い出すと、すくんだ足を踏み出す原動力となった。そんな私の心境を察してなのか、二人の前に出たその時、ブチが

「社長・・・とはいえ、女の子なんですから、俺達の間に来て下さい、その方が安心でしょ？」

そう言いつつ、私の右側に立つブチ。そして

「ま、こういう時には女子が男子の間ってのは暗黙の了解ってとこスかね。」

左側にはシマ立つと、不意に私の腕を組んできていた。それを見ていたのか、ブチも、私の腕を組む。私はされるがままに、三人並ぶような格好で、懐中電灯の明かりを頼りに階段を下りた。
目の前に広がるのは、真っ暗で、不気味な空間。そして両脇には同年代の男性、こんな経験は初めてで、不思議と心臓の鼓動が高まっていった。なんだろう？この気持ち、風邪でもひいたんだろうか？
とにかく、それを落ち着かせるため、二人に話しかけた。

「あのね、私が小さい頃、お爺ちゃんの家に泊りに行った時、寝る部屋が真っ暗だったんだ。ほら、小さい頃って、無意味に暗闇が怖かったじゃない？私もそうだった。それでお爺ちゃんに泣きながらそのことを言ったら『いい歌を教えてやろう』って、これを歌い

ながら行きなさいって。それがね今から歌うから、ちょっと聞いてて。」

そう言いつつ、階段をゆっくりと降りながら歌った。

『♪おばけなんか　ないさ・・・おばけなんて　うそさ・・・ほんとうに　おばけが・・・でてきたら　どうしよう・・・れいぞうこに　いれて・・・カチカチに　してやろう・・・だけどちょっと　だけどちょっと・・・ぼくだって　こわいな・・・おばけなんて　ないさ・・・おばけなんて　うそさ・・・』

「こんな感じの歌。フフ・・・面白いでしょ？小さい頃の記憶だからうろ覚えだけど『冷蔵庫に入れて』って下りが面白くて何度も歌ってた」

そう言って、二人を見ると

「あー、知ってるっス、歌詞はなんとなくだけどメロディくらいなら覚えてるっス」

「私もです、大の大人がこんな歌、大声で歌うのもアレですが、幸い俺達しか居ないみたいだし、出口まで歌います？」

そう言うとブチがすぐさま口ずさみ始めた。それに引っ張られるかのように私もくちずさむ。

歌いながら、ゆっくりと階段を降りて、そのまま五階、そして四階の廊下に下り、三階に続く階段に、一歩踏み出そうとしたその時のことだった。

【パキッ！パキッ！】

どこからか指を鳴らすような音、それに続き

【ズルズル・・・ズルズルズル・・・】

今度は、何かを引きずっている音がした。その音と異様な雰囲気に

「な・・・何・・・？」

思わずブチとシマの腕を強く握った。すると

「何・・・でしょう・・・」

「なん・・・スかね・・・」

顔を見合わせ二人。するとまた

【ズルズル・・・ズルズルズル・・・】

再び不気味な音がした。すると、シマが怯えた声を出しながら

「何か・・・上の方、今来た所からするみたいっス」

そう言いつつ後ろを振り返った。すると、そのまま目を見開いたまま、『かっ！？』と空気が漏れるような声を出し固まってしまった。

「ちょっと！どうしちゃったのよ！？シマっ！」

声をかけると、ゆっくりと階段の上の方を指さした。それに、思

わず彼の視線の先を目で追った時、目に映ったもの、それは

ボロボロの軍服を纏い、顔が半分白骨化した、かなり大きな男の姿だった。

しかも、それが壁にもたれかかり、体を引きずりながらヨロヨロと階段を下りてきていた。

さっきの引きずるような音は、アレが動くたびに服と壁が擦れる音だったのか。

驚き固まる私達に気付いたのか、少し足を止め、掌をめいいっぱい広げ、ゆっくりと腕を伸ばしながら

「ウアアァァァァァァァ・・・」

声にならないうめき声を上げた。

その姿に、瞳孔がこれ以上ないくらい開いてゆき、思わず声を上げそうになったその時

「ぎぃやああぁぁぁぁぁっ！」

いつの間に見ていたのか、真っ先に悲鳴を上げたのは右隣のブチだった。そして、声と同時に、私の腕を強く引っ張ると、私を引きずるように、階段を駆け降りてゆく、そして、その悲鳴に我に返ったのか、遅れてシマが後ろから付いてきた。

少しして、追いついたシマの手をしっかりと握った。そのまま三階をすり抜け二階へ、走っている間も、さっきのうめき声が

「・・・ウアアアァァァァァ・・・・」

と、少し小さくなったもののまだ声が聞こえていた。
何かにとりつかれたように、一階へと続く踊り場を駆け抜け、一階まで降りたその時、そこまで転げ落ちるように走り続けたのと、3人手を繋いでいたのもあり、もんどりうって床に転がった。
慌てて体勢を起こすと
「はっ・・・！はっ・・・！ヤッ・・・ヤバいっス！一体何なんスか！何なんスか！あれはっ！」
シマが息も絶え絶えに、怒気をはらんだ声を出した。すると
「知らんっ！とっ・・・とにかく早く出よう！出口はもうすぐだ！」
勢いよく立ちあがるブチだったが、今までのことで、すっかり私は腰が抜けてしまった。そして、シマも私と同じようなことになったらしい。
いつまでたっても、起き上がらない私とシマの腕を、ブチが引っ張り上げ、二人分まとめて肩を担いた。
「社長、ここは一階、後一息、出口までもうすぐです。さっさと帰りましょう！」
荒い息を吐きながら、そう言って笑った。さっき、私達の中で最初に大きな悲鳴を上げ、一目散に逃げ出していた彼が、今は一番しっかりしていた。
そんな彼を見つめ無言で頷く、そして長い廊下を、一歩、また一歩とゆっくり踏み出したその時

【キィ・・・キィ・・・】

廊下のずっと先から、かすかに錆びた車輪のようなものが回転する音がした。それに

「またかよ・・・もう勘弁してくれって」

そう呟くブチ、私は彼の肩によりかかる格好のまま、考えた。ここはL字型に伸びる廊下の角の所だ。真っ直ぐ行くと、出口につながる通路、そして、左側に伸びる廊下は、確か、大浴場だった所へ続いているのだが、道はあれど、床が抜けていたり、ところどころ下地に使っていた建材がむき出し、しかも腐っていて歩けるどころの騒ぎではない。うっかり地下に落ちるともうそこから上に上がる階段は、ガレキで塞がれているため通れない、上には得体の知れない軍服の男、左はダメ、そうなると音のする方しか行く道はない。

やっぱり、音がする方へ進むしかないのか。そう思い、ブチとシマに声をかけた。

「・・・ブチ、とりあえず進みましょ、あの音は風の音かもしれないわ」

私がそう言った矢先

【キィ・・・キィ・・・】

さっきと同じ音がした。まだ遠くに居るようだけど、音が若干大きくなっているような気もする。すると

「・・・社長、行くんスか？」

不安そうな声を上げるシマ。そんな彼に

「上には戻れない、そして左には行けない、となると前に進むしかないでしょ？」

恐怖で涙がこぼれそうになるのを、必死で堪え、しっかりとした口調で言う。でも、本当は私だって怖い、もう声を上げて泣きたかった

でも、父から会社を託されたあの日から、から何があっても、人前で泣かないと決めた。そうせざるを得なかったのだ。大勢を抱える会社の長として、絶対に弱みは見せたくなかった。

弱みを見せること、それは、私が、私であることの存在意義がなくなるということだ。

とはいえ、ここに来て、さっきの得体のしれない何かに驚き、更に腰まで抜かした上、バイトとはいえ会社の人間に肩を担がれている。

自分自身が決めたこと、それを曲げてしまった。そんな自分が嫌なのにこれ以上部下に弱みは見せられない

その思いが、力の抜けた足に力を込めさせた。

「ブチ、ありがと。もういい、もう歩けるから、そして、ここからは私が先頭で行く。『株式会社オレノ』の社長として！」

強くそう言うと、手をかけた彼の肩から腕を抜き、ゆっくりと出口に向かって歩き出した。

その間も【キィ・・・キィ・・・】と不気味な音は近づいてくる、そして私の後ろをゆっくりと付いてくるシマとブチの気配を背中に感じていた。

歩みを進める廊下を、割れた窓から月明かりが射し込んだ。更に進んだその先に、徐々にではあるけど、ボーっと何かが立っている

のが見えた。
目を凝らして良く見ると、真っ白い服を着た何かが、大きな車輪のついた鉄の塊を押しているのだ。

「クソッ！」

吐き捨てるように言うと、ギリっと唇を噛んだ。
挟み撃ちってわけか、しかも、どうみてもこの世の者とは思えないアイツは、廊下のど真ん中を、私達の方に向かって進んできている。
廊下の構造から、三人いっぺんに、横をすり抜けるのはほぼ無理ということはすぐにわかった。
この絶体絶命の事態を把握したその瞬間、高鳴る心臓とは裏腹に、体の余計な力が、スっと抜けて行く、それと同時に、不思議と涙がとめどなく流れた。
泣いているのは絶対悟られたくない。そんな思いから、後ろの二人に、振り向かないまま

「シマ・・・ブチ・・・私の我がままに付き合ってくれてありがと。そして、こんな目に遭わせてごめん。あなたたちには、迷惑ばかりかけたけど、最後に社長らしい事するわ。これから私が、アレを全力で食い止める。その間にあなたたちは、ここから出て車で逃げなさい！」

そう言って後ろ手に車のキーを投げた。確認はしていないが、床に落ちたのだろう、チャリンと堅い音がした。それと同時に

「早く行きなさいっ！」

そう、二人に叫んでいた。もう覚悟は出来ている、私だって、み

すみす取りこまれるつもりはない、最期の時が来るまで、全力で抵抗してやる！そう思い一歩踏み出そうとしたその時だった。

「ブチさん！社長を抑えるっス！」

シマの叫び声が聞こえた。その声に呼応するかのように

「おおぉぉぉぉぉっ！」

ブチの声、その瞬間、腰のあたりに大きな、温かい手に掴まれる感触があり、私の体が宙に浮いた。

慌てて首を捻ると、そこにいるのはブチの丸い顔があった。私は強い力になすがまま抱えられているのだ。

またしても、部下に弱みを見せてしまうという恥ずかしさが体を走ると同時に、それとは正反対の感覚、何かこう、全て身を委ねてしまいたいような気持ちもあった。

その感覚が大きく、そのまま流されそうになったものの、私の心の中で、社長としてのプライドの方が少し勝ったのか、気を取り直し、ブチに怒鳴った。

「ブチ！何するのよ！早く逃げなさい！私は社長として部下を危険な目に遭わせた！その償いはしないといけないの！だから放せっ！・・・お願い・・・だから・・・放してよっ！」

必死に体を攀じってもがくも予想以上に彼の力は強く、そのままギュっと抱きしめられ動けなくされてしまった、必死にもがく私にブチの声がした。

「うるさいっ！こんな時に社長だ部下だそんなつまらんものは関係ないだろっ！いいから良く聞けっ！みんなここから無事に出るん

だ！それに・・・男は女を守るもんだって父ちゃんが言ってた！お前もそうだろっ！シマっ！」

怒鳴りながらも、目の前のアレが怖いのか、声は震えている。

「当たり前ス！とはいえ、俺が小さい頃、父ちゃんは事故で死んでるんで、爺さんなんスけどね、男は小さいときからそういうのを叩きこまれてるっス！」

そう言うと目の前で手当たり次第ドアに手をかけて、手当り次第ガタガタやりながら、続けた。

「キレ者と名高い若社長にしては、諦めが早くないッスか？廊下の窓の下は切り立った崖、脱出は不可能スけど、客間側の窓の外はそうじゃなかったはずっス。ここは廃墟、窓の1個2個壊したくらいで苦情は来ないっス！出口がダメなら作ればいいだけっスよ！アレ・・・？ってゆうかどこも開かないっスね。」

その間にもゆっくり、ゆっくりと鉄の塊を押した何者かが近づいていきていた、それに慌てた様子のブチが

「シマ、開かないならいっそのこと蹴破れっ！」

私を抱えながら大声を出す、そんな彼にシマが

「蹴破るも何も、作りがいらなく頑丈で無理ッス、でも一個くらい・・・って、あった！」

声と同時に、ドアノブのついた扉、それが勢いよく開いた。気が付いた時には、すぐそこには得体の知れない何かが近づいてきてし

まっていた。
月明かりに照らされたどの顔は、光の加減のせいななか、顔が青白く、見開かれた目の真ん中には白い点のような瞳、カサついたように見える肌、棒切れのように細い腕、そして捻じ曲がった指、口は半開きのまま、私たちに腕をゆっくりと腕を伸ばしてきている。
あまりの異様な姿に目が釘付けになり、目をそらすことができなくなっていた、このまま取り込まれてしまうのか・・・思わず固く目を閉じた時、シマの声がした。

「ブチさん！早くっ！」

そう言うと滑り込むように入るシマ、それに続きブチが、私を抱えつつ入り、勢いよくドアを閉める、かなりささくれてはいるが畳敷きの部屋、そしてその先には大きな窓が見える。
そして、床には椅子が何脚か転がっているのが見えた。いつの間にか、部屋の真ん中くらいまで来ていたシマが

「ほぅら、思った通りッス、しかもおあつらえ向きにパイプ椅子も転がってる、後は窓を叩き割って出れば車までもう少しッス！」

そう言いつつ彼が、椅子を拾おうとした矢先、私のの頭の上から

【クスクスクス・・・クスクスクス・・・】

複数の笑い声、あの得体の知れない何かから逃げきりゴールは目前・・・のはず、なのにまた新たな何かが居るのだ、今まで何度となく味わった絶望感から思わず

「今度は・・・今度は何よ、もう・・・もう嫌・・・嫌あぁぁぁぁぁっ！」

もう既に感情を剥き出しにして叫ぶしかできなかった。散々恐怖を味あわされた揚句、部下に守られてしまう結果となり、社長としての威厳も尊厳もことごとく粉々にされていくのを感じていた。
しかも、この状況で私がしていることといえば、バイトの男にしがみついているだけ。会社では偉そうに親くらいの年齢の部下を相手にしていても、結局は小さな女の子でしかないのか・・・。
色んな思いが交錯し、それと同時に、涙が後から後から流れていた。肩を震わせ嗚咽を漏らすことしかできない私に、ブチが静かに言った。

「・・・社長、ここは俺達が何とかします、とにかく目を固くつぶって、そして・・・上だけは俺がいいと言うまで絶対見ないでください。約束してください。」

私はその言葉に、小さく頷くことしか出来なくなっていた。
それを感じたのか、彼が再び、頭を抱え、私を抱き寄せた。その時、私の額が、ブチの胸のあたりに当たった時、彼の心臓がドクドクと脈打っているのが聞こえてきた。
その音を聞いていると、周りをグルッと幽霊に囲まれ、かなり危険な状態なのに、安心できた。そして、この人に抱えられている間は何があっても大丈夫、根拠は無いけど、そんな気さえしていた。
そして彼の心臓の鼓動に合わせるように私の鼓動が共鳴していく、そして大きな何かに流されてゆき、自然とブチの背中に手を回すと、力いっぱいギュっと抱きしめた。それを彼は感じたのか

「シマっ！早くやってくれ！男二人がかりで女一人守れんようじゃなぁ！」

目を固く閉じた真っ暗闇の中、私の耳にブチの声がした、すると

今度はシマが元気に

「任せるッスよ！」

そう一声叫ぶと同時に、ガラスの割れる音がした。そのとき、ブチが私の耳元囁くのが聞こえた。

「もう大丈夫です、後は外に出るだけ、でも、まだ目は閉じたままでお願いしますよ。今シマが外に出ています。今度は俺達の番、やっと帰れますね。」

その声と同時に身体が揺れた。ブチが歩いているのだろう、少しすると、身体が浮いた。多分、彼が私を抱えながら、窓を乗り越えているのだろう。

身体が安定すると同時に、晩秋の冷たい風が体を撫(な)でた。その冷たさが、建物の外に出たということを実感した。

それでもまだブチは、目を開けていいとは言わなかったので、ドクドクと響く心臓の音を聴いていた。

その音を聞いて思う、いつまでもこうしていたい、そんな不思議な感覚、ブチは小太りだし、お世辞にも格好がいいとはいえない風体、でも私は幸せだった。

そのまま彼は私を抱えたまま何事もなかったように歩き続けた、徐々に晩秋の冷たい風が私の体を冷やしていったとき、ふと、我に帰った。

私は、何をやっているのだろうか？そして、少しとはいえ彼を好きになりかけたこと、そんなことはありえない、幽霊のせいでどうかしていたのだ、そう思った。

そう考えている間も、彼は当然のように私を抱え、歩いていた。あの部屋を出る前に言った「いい」という一言を少し待つも、いつまでたってもそんな素振りは見せなかったので

「・・・ブチ、ってゆうか、私はいつまで目をつぶっていたらいいんだ？そしていつ降ろしてくれるんだ？」

そう訊いてみると

「あ、いや、できればもう少しこのままで、何と言うか・・・女の子ってこんなに柔らかかったもんかなー、なんて、アハハハハハ・・・」

照れたように言うブチに

「・・・お前、減給な」

そう言いながらも、腕に力を込めている自分がいた。

つづく

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7270z/

カメラマンとして、仕事で廃墟に行ったら、大変なことになった。

2012年1月10日04時45分発行